兵庫県文化財調査報告　第349冊

姫路市

高木遺跡

―(都)市川左岸線緊急街路整備工事に伴う埋蔵文化財調査報告書―

平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会

姫路市

高木（たかぎ）遺跡

―（都）市川左岸線緊急街路整備工事に伴う埋蔵文化財調査報告書―

平成21（2009）年3月

兵庫県教育委員会

例　言

1　本書は姫路市花田町小川字長谷に所在する高木遺跡の発掘調査報告書である。

2　この調査は（都）市川左岸線緊急街路整備工事に伴うもので、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所の依頼を受けて、平成12年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が本発掘調査を実施した。

3　整理作業については兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所の依頼を受けて、平成20年度に兵庫県立考古博物館において実施した。

4　本書に使用した航空写真は、伸栄開発株式会社と委託契約を交わして作成した。遺物写真の作成にあたっては、（株）タニグチ・フォトと委託契約を交わして、兵庫県立考古博物館において撮影した。

5　本文の執筆は第３章第３節を菱田淳子が、それ以外を中川 渉が行った。編集は、黒岩紀子の補助を得て、中川が担当した。

6　本報告にかかわる遺物・写真は、兵庫県立考古博物館で保管している。

7　調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。

姫路市教育委員会、秋枝　芳・大谷輝彦・多田暢久・森　恒裕・小柴治子・中川　猛・福井　優（以上、姫路市教育委員会）、中谷悟史（高砂市）（敬称略、順不同）

凡　例

1　座標・水準高

図版に示す方位・座標は国土座標第Ｖ系に則っており、世界測地形への変換は行っていない。

水準高は東京湾平均海水準（Ｔ.Ｐ.）を基準とした海抜高度である。

2　使用地図

本書に使用した地図は下記の通りである。

第１図　国土地理院１／25,000地形図「姫路北部」平成13年3月1日発行
「姫路南部」平成15年1月1日発行

図版１　姫路市１／2,500基本地形図「065」

3　地区割り

調査区の北から10mごとに区分して１～７区とし、遺構の記録・遺物取り上げの便宜に用いた。

4　遺構番号

遺構の略号は、掘立柱建物が「ＳＢ」、土坑が「ＳＫ・ＳＸ」、溝が「ＳＤ」、柱穴が「Ｐ」とする。

5　遺物番号

掲載した遺物の種類には土器・金属器があり、報告Noは土器が１～の通し番号、金属器がＭ１～とする。

6　土器の種別

土器の種別は実測図断面の色を、須恵器が黒ベタ、土師器が白抜き、瓦がトーンで表示することで区別する。

目　次

第１章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２章　調査の経過
　第１節　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　第２節　分布調査・確認調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　第３節　本発掘調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　第４節　出土品整理・報告書作成作業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第３章　調査の成果
　第１節　概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　第２節　遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　第３節　遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第４章　まとめ
　第１節　古墳時代後期～奈良時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
　第２節　平安時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
　第３節　結語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

挿図目次

第１図　周辺のおもな遺跡（1：25,000「姫路北部・姫路南部」） ・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第２図　鉄器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

表目次

表１　遺跡地名表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
表２　調査一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
表３　遺物一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

図版目次

図版１　確認調査と本発掘調査の位置図
(1/5,000)
図版２　調査区位置図（1/500）
図版３　遺構全体図（1/250）
左 遺構のみ／右 等高線入り
図版４　調査区断面図（縦1/30、横1/300）
図版５　掘立柱建物ＳＢ01～02
図版６　炉跡遺構
図版７　土坑・溝
図版８　土器(1)　1-26
図版９　土器(2)　27-41
図版10　土器(3)　42-58
図版11　土器(4)　59-77
図版12　土器(5)　78-102

写真図版目次

写真図版１　航空写真
１　遺跡遠景（南から）
２　同上（西から）
写真図版２　航空写真
調査区全景（真上から）
写真図版３　遺構(1)
１　調査区全景（北から）
２　東壁断面　２区付近
写真図版４　遺構(2)
１　調査区全景（南から）
２　東壁断面　８区付近
写真図版５　遺構(3)
１　掘立柱建物ＳＢ01（北西から）
２　掘立柱建物ＳＢ02（西から）
３　ＳＢ02のＰ36と土坑ＳＸ03の
切り合い関係（北西から）
写真図版６　遺構(4)
１　２区の炉跡、落ち込み、
ピット群（北から）
２　同上（西から）
３　柱穴Ｐ29断ち割り断面（西から）
写真図版７　遺構(5)
１　炉跡（南から）
２　ＳＸ07
土器検出状況（南から）
３　炉跡断面（北から）
４　ＳＸ07出土須恵器杯
写真図版８　遺構(6)
１　土坑ＳＸ04全景（西から）
２　同上　断面（西から）
３　同上　全景（南から）
写真図版９　遺構(7)
１　土坑ＳＫ02断面（南東から）
２　土坑ＳＸ04礫群（西から）
３　同上　実測状況
４　機械掘削
５　人力掘削
６　現地説明会
７　同左
写真図版10　土器(1)
写真図版11　土器(2)
写真図版12　土器(3)
写真図版13　土器(4)
写真図版14　土器(5)、鉄器
写真図版15　瓦

第１章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

姫路市街地の北東方向にある増位山と城見台にはさまれた狭隘部から姫路平野へ流れ出した市川は、蛇行しながら南流し、野里付近を要とする扇状地を形成している。高木遺跡が所在する花田町は、高木橋付近を頂点に大きく東へ弯曲する市川の左岸に抱かれるような地点に位置する。

『北条遺跡』（兵庫県文化財調査報告第325冊）において山田が作成した地形分類図（同報告第５図）によると、市川の河道が堤防で現在の場所に固定される以前は、網流状の河道が平野部を覆っており、遺跡はその中洲状の微高地に立地していたものと考えられる。

今回の調査地点は、地籍図上「高木」に含まれるため「高木遺跡」としているが、現在の行政区分では「姫路市花田町小川」の範囲内である。「小川」は播磨国風土記飾磨郡の条に記載される「少川（小川）里」の遺称地で、市川の本流である「大川」に対する支流の意味であろうと解釈されている。

花田町は姫路城を西に望み、市川に架かる小川橋を渡った国道372号が東西に抜けている。国道372号は飾東町を経て北播磨に通じ、さらに丹波・京へ達する要路である。高木橋から小川橋にかけての市川左岸一帯は、古くから姫路皮として有名な皮革産業が盛んで、そのため市街地化が早く、現況から旧地形を復原するのは困難な状況である。

参考文献

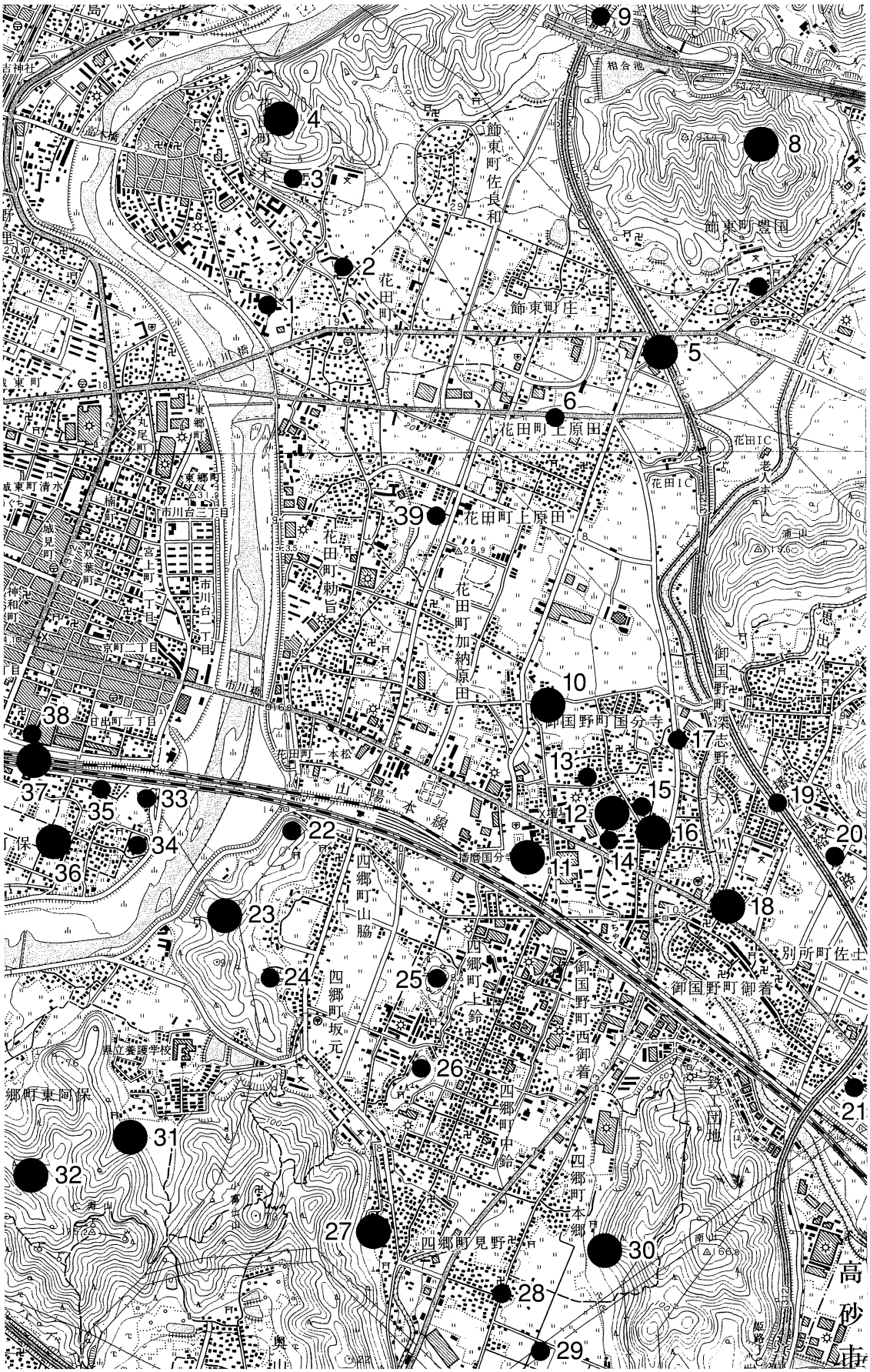
岩波書店1982（第25刷）「播磨国風土記」『風土記』日本古典文学大系２

山田清朝2008「第1章第1節地理的環境」『北条遺跡』（兵庫県文化財調査報告第325冊）兵庫県教育委員会

第２節　歴史的環境

市川下流域左岸の花田町一帯では、播但連絡道の建設に際して上原田遺跡(5)、黒岩山遺跡(9)などが発掘調査されている。播磨国分寺から約1.5km北方の段丘上に位置する上原田遺跡は、奈良時代～平安時代の建物群が調査され、官衙的な性格をもつ遺跡と考えられる。黒岩山遺跡は丘陵の尾根線上に立地し、弥生時代の竪穴住居、古墳時代の箱式石棺などが検出された。さらに最近、花田町加納原田(39)において行われた立会調査によって、土坑から初期須恵器・韓式土器などが出土した。同様の土器は市川右岸の市之郷遺跡(37)でも出土しており、渡来人との関係が指摘されている。

花田町の南側に位置する御国野町は古代山陽道が貫通しており、古墳時代～奈良時代の重要な遺跡が集中している。播磨国分寺(11)と播磨国分尼寺(10)は山陽道をはさんで南北に位置している。播磨国分寺は二町四方の寺域に、南大門・中門・金堂・講堂が南北に並ぶことがわかっている。播磨国分尼寺は国分寺から約600m北側の台地上に位置し、東西134m、南北180mの寺域が確認されている。播磨国分寺の約400m北東にある壇場山古墳(12)は播磨最大の前方後円墳（全長142m）で、その後継する首長墳である方墳の山ノ越古墳(13)とともに、主体部には長持形石棺が直葬されている。壇場山古墳から古代山陽道に沿って約700m南東の御着城跡(18)は、天川左岸に築かれ、戦国時代末期には小寺氏の居城となり、天正７年頃に羽柴秀吉によって落城したとされる。昭和52～54年の発掘調査では、堀の一部や



第１図　周辺のおもな遺跡（1：25,000「姫路北部・姫路南部」）

土塁の痕跡・井戸・建物跡などが見つかった。

御国野町の南側に続く四郷町と市川の間には小冨士山・仁寿山の山系が立ちはだかり、姫路平野から遮られている。丘陵東面の尾根の先端に築かれた宮山古墳(24)では３基の竪穴式石室から、金製垂飾付耳飾り・銀錯貼金環頭大刀・金銅製帯金具・初期須恵器といった大陸系の副葬品が大量に出土しており、先述の市之郷遺跡や花田町加納原田が、その母体となる集団と目されている。さらに南東へ1.5kmほど下ると、古墳時代後期の見野長塚古墳(29)、見野古墳群(27)がある。見野長塚古墳は２基の横穴式石室をもつ前方後円墳で、後円部の石室から装飾付須恵器・馬具・内行花文鏡などが出土した。見野古墳群は20基近くからなり、横穴式石室を主体部とする。平成17年から19年にかけて、立命館大学による発掘調査が行われ、６号墳が双室墳であることが明らかになるなど、大きな成果が上がっている。

参考文献

兵庫県1992『兵庫県史　考古資料編』

兵庫県教育委員会1980『播但連絡有料自動車道建設にかかる埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ（兵庫県文化財調査報告第13冊）

兵庫県教育委員会2005『市之郷遺跡』（兵庫県文化財調査報告第286冊）

姫路市教育委員会1981『御着城跡発掘調査概報』

姫路市埋蔵文化財センター 2005『宮山古墳』姫路市埋蔵文化財センター開館記念特別展図録

姫路市埋蔵文化財センター 2008『渡来人の考古学』平成20年度秋季企画展展示図録

表１　遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	高木遺跡	花田町小川	21	東芝崎遺跡	別所町佐土
2	小川廃寺	花田町小川	22	八重鉾山構跡	四郷町山脇
3	石積山古墳群	花田町小川	23	坂元山群集墳	四郷町坂元
4	石積山城跡	花田町小川	24	宮山古墳（県指定）	四郷町坂元
5	上原田遺跡	花田町上原田	25	上鈴山古墳	四郷町上鈴
6	上原田廃寺	花田町上原田	26	中鈴山古墳	四郷町中鈴
7	豊国廃寺	飾東町豊国	27	見野古墳群（市指定）	四郷町見野
8	庄山城跡	飾東町豊国	28	見野遺跡	四郷町見野
9	黒岩山遺跡	飾東町佐良和	29	見野長塚古墳（県指定）	四郷町見野
10	播磨国分尼寺跡	御国野町国分寺	30	火山群集墳	四郷町見野
11	播磨国分寺跡（史跡）	御国野町国分寺	31	阿保百穴群集墳	四郷町東阿保 他
12	壇場山古墳（史跡）	御国野町国分寺	32	仁寿山群集墳	四郷町東阿保 他
13	山之越古墳（史跡）	御国野町国分寺	33	市之郷長土堤遺跡	阿保
14	林堂東塚古墳（史跡）	御国野町国分寺	34	阿保下長・永河原遺跡	阿保
15	櫛之堂古墳（史跡）	御国野町国分寺	35	阿保構跡	阿保
16	国分寺台地遺跡	御国野町国分寺	36	阿保遺跡第２地点	阿保
17	国分寺構跡	御国野町国分寺	37	市之郷遺跡 （仮称 姫路駅周辺第３地点）	市之郷
18	御着城跡	御国野町御着			
19	前東代遺跡	御国野町深志野	38	市之郷廃寺	市之郷
20	大村千軒遺跡	別所町佐土	39	（遺跡名未定）	花田町加納原田

第２章　調査の経過

第１節　はじめに

兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所は、姫路市北東市街地において国道312号と国道372号を連絡し、中心市街地への交通流入を分散させることにより、交通の円滑化を図るため、都市計画道路市川左岸線の整備を街路事業で進めてきた。

事業地のうち市川左岸の花田町高木地区は市街化が早かったため、埋蔵文化財の状況はこれまで知られていなかった。そこで事業の進捗に伴い、平成４年～平成11年にかけて兵庫県教育委員会は、事業地内において埋蔵文化財の分布調査・確認調査を実施した。

第２節　分布調査・確認調査

１　分布調査

平成４年４月（遺跡調査番号920126）と平成７年４月（遺跡調査番号950064）の２度にわたって事業計画地内を踏査したが、市街化が進んでおり、遺物の散布状況および地形観察等を行うことができなかった。しかし現高木集落は微高地上に位置しており、埋蔵文化財が存在している可能性もあるため、住宅の立ち退き後に再度の分布調査が必要と判断された。

２　試掘調査・確認調査

事業計画地のうち既存物件が立ち退いた範囲については、盛土等があり地表面観察が不可能なため、試掘を伴う調査を順次実施した。

平成４年度　遺跡調査番号920368

平成５年２月に道路センターNo.69～No.74の範囲を調査対象とし、道路センターNo.ごとに２ｍ四方の調査グリッドを６箇所設定した。その結果、北端の4－1（No.69）グリッドと南端の4－6（No.74）グリッドで安定したベース面と土器を検出し、調査範囲の北側と南側に遺跡が存在する可能性が考えられた。

平成７年度　遺跡調査番号950277

平成７年10月に道路センターNo.55～No.64の範囲を調査対象とし、道路センターNo.ごとに２ｍ四方の調査グリッドを10箇所設定した。その結果、すべてのグリッドで安定したベース面を検出したものの、遺物は含まれておらず、埋蔵文化財は存在しないものと判断された。

平成８年度　遺跡調査番号960309

平成８年11月に道路センターNo.65～No.68とNo.75～No.76の範囲を調査対象とし、道路センターNo.ごとに２ｍ四方の調査グリッドを６箇所設定した。その結果、南側の8－5・6（No.75・76）グリッドで遺物包含層と遺構面を確認し、8－6グリッドでは柱穴と溝状遺構を検出した。

平成９年度　遺跡調査番号970414

平成10年１月に市川右岸の道路センターNo.6～No.10と、左岸の道路センターNo.29～No.38の範囲

を調査対象とし、道路センターNo.ごとに２ｍ四方の調査グリッドを10箇所設定した。その結果、すべてのグリッドで不安定な砂礫層が認められ、氾濫原にあたっているため、埋蔵文化財は存在しないものと判断された。

平成11年度　遺跡調査番号990248

平成11年11月に道路センターNo.34～No.45とNo.77～No.78の範囲を調査対象とし、２ｍ四方の調査グリッドを５箇所設定した。その結果、北側の11－1～4グリッドでは遺構・遺物が認められず、埋蔵文化財は存在しないものと判断された。また11－5グリッドでは中世の土器片が含まれていたものの遺構は認められず、8－6グリッドで見つかった遺構面は、ここまで及んでいないものと判断された。

以上の調査の結果、4－5・6グリッドと8－5・6グリッドの範囲に、遺物包含層と遺構面の広がりが認められることが判明した。

表２　調査一覧表

遺跡調査番号	調査種別	調査担当者	調査期間	調査面積（㎡）	取扱い	回答文書
920126	分布調査	平田博幸 長濱誠司	平成4年4月13日	25,500	要再調査	平成4年11月25日 教埋文第955号
920368	分布調査Ｂ	種定淳介	平成5年2月4日	24	一部要発掘調査	平成5年3月5日 教埋文第1340号
950064	分布調査	岸本一宏 仁尾一人 高木芳史	平成7年4月26日	34,000	要再調査	平成8年3月29日
950277	分布調査Ｂ	種定淳介	平成7年10月17日 ～10月19日	40	埋蔵文化財なし	平成7年11月2日 教埋文第1050号
960309	確認調査	矢野治巳	平成8年11月12日	18	一部要発掘調査	平成8年12月6日 教埋文第1660号
970414	確認調査	鈴木敬二	平成10年1月19日 ～1月20日	40	埋蔵文化財なし	平成10年2月2日 教埋文第1616号
990248	確認調査	多賀茂治	平成11年11月11日	20	埋蔵文化財なし	平成11年11月24日 教埋文第768号
2000199	本発掘調査	中川　渉 松岡千寿	平成12年8月17日 ～10月12日	620	記録保存	平成12年12月6日 教埋文第893号

第３節　本発掘調査

姫路土木事務所からの依頼（平成12年５月25日付け　姫土第597号）に基づいて、平成12年８月17日～10月12日の期間で実施した。調査の対象範囲は、おおよそ道路センター№73～76の区間である。現地は市川にかかる小川橋から北東約100ｍの、工場地帯の中に位置し、市川左岸線と国道372号の合流点北側にある高木前処理場の北側にあたる。

調査区は幅10ｍ、延長約64ｍの南北に細長い形状で、北から10ｍごとに１～７区とし、遺構の配置・

遺物の取り上げの際の目安として用いた。

なお調査に先立って、周辺の民地への進入を確保するために、道路両側の歩道予定地部分に仮設道を設けた。また掘削面への立ち入り・転落を防止するために安全フェンスを設置した。特に隣接する工場への防塵対策として、南側には高さ３ｍの防塵シートを設置した。

調査はまずバックホウによって盛土・耕土・堆積土を掘削し、残土は10ｔダンプトラックによって処分場へ搬出した。なおコンクリート基礎も取り壊して同様に搬出・処分した。次に人力によって遺物包含層の掘削・遺構面の精査・遺構の掘削を行った。人力掘削の残土は４ｔダンプトラックによって処分場へ搬出した。調査で見つかった遺構は、ヘリコプターを用いて撮影した空中写真から１／50縮尺の遺構平面図に図化した。その他撮影用足場からの写真撮影および適宜作成した平面図・断面図などで細部の記録を行った。記録保存した図面・写真は、出土遺物とともに兵庫県教育委員会が保管している。９月29日には地元説明会を開催して調査成果を一般に公開し、説明会には地元の方および小川中学校の生徒など、約300名の参加があった。

第４節　出土品整理・報告書作成作業

出土品の整理作業は平成20年度に、兵庫県立考古博物館において実施した。実施した内容は、土器・石器の水洗い・ネーミング・接合補強・実測・拓本・復元・写真撮影、金属器の保存処理、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷である。

調査担当職員	主査　中川 渉
整理担当職員	担当課長補佐　岡田章一、主査　篠宮 正　（工程管理担当）
	主査　岡本一秀　（保存処理担当）
非常勤嘱託員	吉田優子　島村順子　伊藤ミネ子　奥野政子　三好綾子　荒木由美子　荻野麻衣
	谷脇里奈　吉村あけみ　（接合・復元等担当）
	黒岩紀子　杉本淳子　高橋朋子　（実測・トレース等担当）
	大前篤子　藤井光代　長濱重美　（保存処理担当）

第３章　調査の成果

第１節　概要

高木遺跡では掘立柱建物跡・土坑・溝・不定形な落ち込みなどが見つかり、古墳時代後期～平安時代の集落遺跡であることが判明した。遺跡は市川左岸の扇状地上に位置する。基本層序は0.4～0.8mの盛土、旧耕土層、近世土壌層、平安時代～古墳時代遺物包含層、砂礫層（遺構検出面）の順になり、地形は北から南へ向かって低くなっている。

検出した遺構には古墳時代後期～奈良時代（６世紀末～８世紀）の炉跡・土坑・溝・ピット群、平安時代（11世紀代）の掘立柱建物跡・土坑などがある。以下、遺構・遺物に分けて説明する。

第２節　遺構

遺構の略号は、掘立柱建物が「SB」、土坑が「SK・SX」、溝が「SD」、柱穴が「P」とする。土坑の略号は調査段階で、不定形なものや特徴的な形態のものを「SX」と仮称していたが、そのまま踏襲して報告する。

１　掘立柱建物（SB）

掘立柱建物SB01（図版５、写真図版５）

７区の調査区南東隅に位置する。西辺の一部を検出しており、梁間１間以上×桁行２間以上の建物である。規模は梁間方向が3.3m、桁行方向が4.0mで、検出範囲内の床面積は13.2㎡。柱間は梁間が3.3～3.4m、桁行が2.0m。棟の方位はN15°Eである。柱穴は直径が25～30cmの円形掘り方である。

遺物は、柱穴から土師器の細片が出土しているが、図化できたものはない。

掘立柱建物SB02（図版５、写真図版５）

５区の調査区東壁沿いに位置する。西辺と南辺の一部を検出しており、梁間１間以上×桁行２間以上の建物である。規模は梁間方向が2.4m、桁行方向が4.25mで、検出範囲内の床面積は10.2㎡。柱間は梁間が2.4m、桁行が2.05～2.2m。棟の方位はN16°Eで、SB01とほぼ揃っている。柱穴は直径が35～45cmの円形掘り方である。

遺物は、柱穴Ｐ03から平安時代の土師器椀底部（2）、柱穴Ｐ04から須恵器椀（1）が出土した。

２　炉跡遺構

２～３区に位置し、炉跡１基と、それに隣接する不定形な落ち込み（土坑SX07）、さらにその東側に並ぶピット群を、１つのセット関係として捉える。

炉跡（図版６・７）

２区の中央に位置する。平面は楕円形、底面は水平で、砂礫層に掘り込まれていた。規模は長径1.0m×短径0.85m、深さ10cmである。埋土からは焼土塊・土器片などが出土したが、砂地ということもあって床面の焼けはそれほど強くなかった。

なお埋土の成分が磁石によく反応したため、当初は鍛冶炉としての性格を想定していた。しかし詳細に調べたところ、その鉄分はもともとの地層に含まれる砂鉄で、鍛造に伴う微細な鉄片、いわゆる“鍛造剥片”ではなく、鍛冶炉の可能性は小さくなった。

埋土からは長胴甕の破片が出土した。

土坑（SX07）（図版６、写真図版６・７）

２～３区に位置し、炉跡の南側に隣接する。浅く不定形な落ち込みで、南北に長く、北端を攪乱に切られている。底面はやや起伏あるが水平で、砂礫層に掘り込まれていた。規模は長辺の残存長4.3m×短辺3.9m、深さ10cm弱である。埋土には被熱した礫や炉から掻き出したとみられる炭・焼土などが含まれるところから、炉跡に伴う作業スペースであったとみられる。

図化した遺物には、古墳時代後期の須恵器杯蓋（6）・杯（7・8）・まり（9）、土師器甕（10）がある。

ピット群（図版６、写真図版６）

炉跡、SX07と調査区東壁の間は10cmほど高くなっており、その南北に細長い空間で、10数個のピット群（Ｐ18～20、Ｐ24～33）を検出した。それらの掘り方は直径40～80cmの円形で、上部は削平されているらしく、深さは10～20cm程度しか残存していない。柱痕は認められず、掘り方内には直径10～20cmの河原石が詰められていた。礎石の根石にも似た検出状況であるが、周辺に瓦がまとまって出土してはいない。調査区の方向に沿って、１～２ｍの間隔で１列に並ぶようにも見えるが、建物の復原には至らなかった。

遺物は、柱穴Ｐ33から土師器甕（4）、Ｐ19から須恵器甕（5）が出土した。

３　土坑（SK、SX）

土坑SX04（図版７、写真図版８・９）

５区に位置する。平面不整円形の大きな土坑で、肩部から斜めに掘り込むが、その傾斜は東側が緩く、西側が急である。底面はやや起伏があるが全体的には水平で、肩部から底面にかけて20～50cm大の礫を立て並べていた。礫は被熱のため部分的に赤変しており、そこで火を焚いたことを物語る。２区の炉跡の場合と同じく、埋土には焼土・炭などが混じっているが、その具体的な用法や機能については不明である。規模は径3.3m×3.7m、深さ40cmである。

図化した遺物には、飛鳥時代の須恵器杯蓋（11･13･14）･杯（12）･高杯（15）、土師器杯（16･17）･甕（18～20）がある。

土坑SK02（図版７、写真図版９）

２区に位置する。平面は円形で、南西端を攪乱に切られる。底面は水平に掘り込む。規模は径0.9m、深さ15cmである。

図化した遺物には、平安時代の須恵器椀（21～23）、土師器椀（24・25）がある。

土坑SK03（図版３）

１区に位置する。平面は円形で、底面を水平に掘り込む。規模は径0.7m、深さ15cmである。

遺物は飛鳥時代とみられる土師器杯・甕の細片が出土している。

土坑SK05（図版７）

２区に位置する。平面は不整形で、北側を攪乱に切られる。断面は南側を深く掘り込む。規模は残存長1.4m、幅1.5m、深さ25cmである。

図化した遺物には、平安時代とみられる土師器杯（26）がある。

土坑SX03（図版７、写真図版５）

５区に位置する。平面は長方形で、SB02の柱穴に切られ、さらに東端は調査区外である。断面は皿状で、規模は残存長0.8m、幅0.45m、深さ10cmである。

図化した遺物には、飛鳥時代とみられる土師器甕（27）・高杯（28）・把手（29）がある。

土坑SX06（図版３）

４区西辺に位置する。平面は円形で、西半部は調査区外である。断面は逆台形で、柱穴Ｐ21・22に切られている。規模は南北長3.3m、深さ20cmである。

図化した遺物には、飛鳥時代とみられる土師器杯（30～33）・把手（34）がある。

４　溝（SD）

溝SD01（図版３・７）

６区を西から東へ弧状に横切っており、延長約10m分を検出した。残存状況が悪く、途中途切れるところもある。断面は逆台形に掘り込まれ、幅0.4m、深さ10cmである。

出土した遺物は細片のみである。

溝SD02（図版３・７）

３区から４区にかけて北西から南東方向に、断続的な落ちを検出した。調査区中央を斜めに横断する送水管の攪乱のために不明確だが、本来は一連の溝か流路状の遺構と考えられる。断面は皿状に落ち込むが、底面のレベルは一定しない。幅１m前後、最大の深さ23cmである。

図化した遺物には、飛鳥時代～奈良時代の須恵器杯（35）、土師器杯（36・37）・椀（38）・甕（39・40）・把手（41）がある。

第３節　遺物

１　掘立柱建物・柱穴

掘立柱建物SB02（図版８－１・２）

１は須恵器の椀である。端部より少し下がったところでわずかに膨らむ。小片のため、口径・傾きとも推測の域を出ない。２は土師器の椀もしくは托の底部である。底面は回転ヘラ切りのち不調整。内面はやや煤けている。

柱穴内出土（図版８－３～５、写真図版10・12）

３は２区の柱穴Ｐ12より出土した土師器の椀である。須恵器椀１に類似する。４は２区のＰ33より出土した土師器の甕である。口縁部は垂直に近い角度で立ち上がり、端部は小さく丸くおさめる。二次焼成を受け、煤けている。

５はＰ19の他、２～３区の柱穴及び包含層より出土している須恵器の甕である。体部のかなり大きな破片が分散して出土しているものの、頸部以下は接合できなかったため、口縁部のみを図化した。なお胴部については、平行タタキの上から施されたカキメが観察できる（写真図版10参照）。

2　炉跡遺構

炉跡（写真図版12-104）

104は炉跡及びその周辺から出土した土師器の破片であり、写真のみ掲載している（写真図版12参照）。長胴の甕の胴部と思われる。外面は縦方向のハケ、内面は板ナデがみとめられる。

土坑SX07（図版８－６～10、写真図版10）

６～９は須恵器、10は土師器である。６の杯蓋は丸みを帯びた天井部外面に回転ヘラ削りを施すが、工具の圧痕が多く残る。７・８ともカエリが短く退化した杯身である。７の胎土はきめ細かい。カエリに重ね焼きの痕跡がみとめられる。８の底部外面に一文字のヘラ記号が施されている。また、内面は回転ナデ後、調整ナデを施す。底部外面に釉がかかっており、伏せて焼いたものと思われる。９は深みのある「まり」である。底面はヘラケズリを行っている。須恵器の時期は古墳時代６世紀末頃か。10は甕の口縁と考えられる。小片のため、直径・傾きは不明である。内面に横方向のハケメが施されている。

3　土坑・溝

土坑SX04（図版８－11～20、写真図版10）

11～15は須恵器、16～20は土師器である。11の杯蓋は小片のため、口径は推測の域を出ない。右上がり斜めの平行する２本のヘラ傷あり。12は蓋が逆転した形態に近い杯身である。底部内面に仕上げナデ。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ。13は杯蓋の宝珠ツマミで、中央が突出する器高が高いタイプである。自然釉がかかっている。14はカエリを持つ杯蓋の端部である。上面に自然釉がかかっている。15はおそらく低脚タイプの高杯の脚部で、器高は低く裾は大きく広がる。外面は灰をかぶり、ややひずむ。

16・17は半球形の椀状の形態の杯である。16は内面に２段の放射状暗文を施し、外面上半はかなり密に横方向にヘラミガキを施している。外面下半には一部ヘラ削りが認められ、下部の色調は黒っぽい。17の内面の暗文は不規則に施され、外面のヘラミガキもまばらで、下半には指押さえが多く残り、口縁部も水平に仕上げられずに波打っている。16に比べ全体に粗雑なつくりとなっており、都城の土師器を模倣して在地生産された可能性が強い。

18～20は甕の口縁部の破片である。18は小片のため口径・傾きとも不確かである。胎土はざらつく。内外面ともやや粗いハケを施す。19は頸部の破片で、端部は残っていない。内面はヘラケズリを施すが一部に粘土紐の継ぎ目が残る。外面は縦方向のハケメ。破面も含めて二次焼成を受け煤けている。20は大きくラッパ状の口縁部で、端部を角張るようにおさめている。外面下半はハケメをナデ消し、上半には指押さえがやや密に残る。

以上の遺物の時期は飛鳥時代の古い時期に属すると考えられる。

土坑SK02（図版８－21～25、写真図版10）

21～23は須恵器、24・25は土師器である。いずれも底部は糸切りの椀で、口径・傾きとも図上復元である。須恵器は半球形に近い丸みを帯びた形で21は口縁端部をわずかに外反させる。22は内外面に火襷があり、見込みにモミ痕、外面には何かの圧痕が残る。23下半は指ナデの段（稜）が目立つ。

24は器壁の残りも良好である。見込みに仕上げナデが見られる。25は内外面とも摩滅・剥離がみられ、口縁もひずむ。内面に強いナデもしくは工具痕が見られる。時期は平安時代後期と考えられる。

土坑SK05（図版８－26、写真図版10）

26は土師器の杯である。底面はヘラ切り後ナデで指押さえ痕がみられる。端部はつまんでわずかに外

反するようにナデ。時期は平安時代後期と考えられる。

土坑SX03（図版９－27～29、写真図版12）

27～29は土師器である。27の甕の口縁は「く」の字状に外反し、端部は小さく尖るようにおさめる。胴部は上半のみ残存するが、ほぼ球形を呈すると思われる。胴部外面は縦方向の細かいハケ、内面は一部ハケメを残すが、大部分は工具使用のナデで、指押さえ痕が一部に残る。28は高杯の脚柱部である。外面は指押さえと爪形、一部にハケメが見られる。内面は粘土のシボリメや指押さえ痕が残る。29は把手である。鍋もしくは鉢のような球形の胴部に伴うものと思われる。時期の決め手を欠くが飛鳥時代の範疇と考えておく。

土坑SX06（図版９－30～34、写真図版10・11）

30～34は土師器である。いずれも小片で図上復元である。30・31は半球形の椀状の杯（飛鳥・藤原宮の杯Cに類似）で、一段の放射暗文を施す。31は30より暗文は疎らであるが、内面は丁寧にナデており、器壁は薄い。内型成形によるものか。底面に黒斑がある。32・33は30・31より口径が大きい暗文を施した杯である。また口縁端部が小さくつまんで外反するようにヨコナデしている点も異なる。34は把手である。三角形の舌状である。左付け根付近に工具の当たりが残る。時期は飛鳥時代半ば以降と考えられる。

溝SD02（図版９－35～41、写真図版11・13）

35は須恵器、36～41は土師器である。35の杯身は小片の上、摩滅が著しく調整も不明である。

36は30・31に類する半球形の椀状の杯であるが、器壁はかなり厚い。外面に部分的に横方向のヘラミガキがみられる。37は口径の大きい杯で、内面に２段の暗文、外面は横方向のヘラミガキを施しており、飛鳥・藤原宮の土師器杯Aに極めて類似した特徴を持つが、全体の器形はやや異なる。外面下半は粗雑な整形で指痕も多く残る。38の椀もしくは鉢は器壁の摩滅が著しく調整はほとんど不明である。底面のみ条痕・黒斑がみとめられる。

39の甕の口縁も小片で口径・傾きは不明である。調整はヨコナデ。40は卵形の胴部を持つ長胴甕で口縁端部はカットした面を持つ。胴部外面は主に縦方向、胴部内面は横方向のハケメを施す。また内面の底部付近には指押さえ痕が残る。41は把手のある鍋もしくは壺である。胴部は球形で外面はハケ、内面はナデ・把手は三角形の舌状である。飛鳥・藤原宮期から平城宮期にかけての時期のものと考える。

４　包含層

土師器（図版10・11－42～76、写真図版11～13）

42～51は古代の供膳形態の土師器である。

42・43は椀状の杯（飛鳥・藤原宮の杯Ｃ）である。42は半球形に近い形状で、内面に細い放射状暗文を密に施す。外面はやや幅広のヘラミガキを横方向に密に施す。口縁端部は内傾する面をもつように仕上げられており、全体に丁寧な作りである。飛鳥・藤原宮のものとやや異なる器形であるが、比較的古い時期に位置づけられる。43は42より深手で、底部と口縁部の境界で屈曲している。外面下半は粗い工具による不定方向のヘラケズリ痕を残す。内面は見込み部に雑ないわゆる「螺旋状」の暗文、口縁端部から２cm程度下がったところまでを横方向のヘラミガキ、それ以下はややまばらな放射状暗文を施している。なお、下半は内外面とも黒班状に黒くなっている。飛鳥藤原宮Ｉ期に相当する古いタイプと酷似している。

44～48は平城宮期の杯である。44～46は口径14～15cm、47・48は口径16.5cm前後である。44・45

とも底部ヘラケズリ後ナデ。口縁部は内外面ともヘラミガキを施しているが、摩滅などで単位は図化できなかった。45の外面には朱塗りの痕跡らしきものがみとめられる。46は底面にヘラケズリ痕が残る。口縁端部は小さく玉縁状に内側に巻き込む。47は46同様に底部外面にヘラケズリ痕や指押さえ痕を残す。口縁端部は玉縁状。48は底部外面にヘラケズリの後ナデ・ミガキを施し、口縁部外面には横方向のヘラミガキ、内面にも斜放射状の暗文を施している。さらに口縁端部は玉縁状で、全体に丁寧なつくりになっている。ただし口縁部の外傾度は高く、奈良時代半ば以降のものと考えられる。

49～51は鉢であるが、小片のため口径・傾きとも推測の域を出ない。いずれも口縁端部に水平もしくは内傾する面を持ち、わずかに外部に拡張している。49は内面に右上がりの斜放射暗文を施し、外面は摩滅しているため調整は不明であるがヘラミガキを施していたとみられる。50の外面は工具によるナデ、内面は不定方向の暗文もしくは疎らなヘラミガキである。51は外面にヘラケズリ痕を残し、内面はやや粗い斜格子状の暗文を施す。

52～57は土師器の甕である。52は内外面には煤が付着し、内面には黒色物が付着している。53の外面に一部に薄く煤が付着している。外面は縦方向のハケメ。口縁部内面は横方向に断続的にやや粗いハケメが施され、頸部以下は横方向のヘラケズリ痕がみとめられる。54は大きさの割に器壁が厚い。胴部外面の所々に煤が付着している。胴部外面は右下がりのハケメ、口縁部内面は横方向のハケメ、胴部内面は板ナデ。55は口縁端部を欠き、胴部下半も接合できないが、球形の胴部に直立気味に外反する口縁が伴う。胴部は内外面ともハケメを施す。56は胴部上半のみ残存する。頸部の屈曲は曖昧で、なだらかな肩部に続く。口縁端部は１条の凹線がめぐる。外面は右下がりの粗いハケメ、内面は口縁部に部分的に横方向のハケ、頸部の屈曲以下にやや細かい横方向のハケメ、それ以下はナデもしくはオサエ。57は摩滅・剥離のため調整は不明であるが、胴部の内外面は板ナデで仕上げたものか。かなり口径が広い割に薄手のつくりである。

58は29や34と同様の把手で、先端部はわずかに欠損する。内面は横方向の工具使用のナデもしくはヘラケズリが施されている。煤が付着している。

59～61は口縁が大きく開く鍋である。59は内面に横方向の細かいハケを施し、端部はカットしている。口径が小さいため、長胴タイプの甕の口縁の可能性もある。60は全体に摩滅が著しく調整は不明であるが、外面の一部にハケメと指押さえ痕がみとめられる。外面は薄く煤けている。口縁端部はカットされた面をなでている。口縁部に比べ、半球形の胴部は薄手である。61は口縁端部を外側に引き出すように薄くつまんでいる。外面は縦方向、内面の口縁部付近は横方向のハケメ。内面は工具使用のナデ。口縁部外面は薄く煤が付着している。なお、口縁部は湾曲しており、注口部があった可能性がある。

62は甑の口縁部とみられるが、口径・傾きとも不明。端部はカットしたのちナデ。103（図化せず写真のみ掲載。写真図版12）は甑の底部の破片で、半月形の２孔の一部と思われる穿孔が認められる。

63・64は移動式のカマドの破片である。63は庇を持つタイプで、甕などを掛ける掛け口は大きく斜めの面をもつ。外面は縦方向のハケメがみられるが、内面はナデ・指押さえ痕が残る。また庇の下面にはススが付着している。64はカマドの焚き口の基部である。基部の下端には三角形の突出部があり、その根元を巡るようにヘラ傷がみられる。内面は横方向のハケメ。また庇部の貼り付けや調整のための指押さえ痕が多く残る。

65は羽釜である。鍔は口縁部からわずかに下がった位置につき、短く厚い。調整は外面がハケメと指押さえ、内面が板ナデもしくはナデである。

66 ～ 76は平安時代の供膳形態の土師器である。

66 ～ 68はてづくね成形の小皿である。66は底部に煤のようなものが付着している。67は内面に粘土紐の継ぎ目が残り、外面は指で放射状にナデが残る。

69 ～ 73は底面を回転ヘラ切りした小皿である。69は薄く朱塗りしている。焼成は硬く須恵器に近く、胎土も緻密である。72は内外面とも広範囲に煤が付着しており、灯明皿として使用されたとみられる。

74はてづくね成形の大皿である。全体的に摩滅しているが、底部外面にナデ、指押さえ痕が残る。75・76は回転糸切りした托の底部である。どちらも内面に成形時の粘土紐痕が残る。

須恵器（図版11・12－77 ～ 99、写真図版12 ～ 14－103 ～ 105）

77は須恵器の椀である。底部は回転糸切り。やや瓦質に近い焼成である。時期は平安時代後期である。

78は５区の柱穴Ｐ07（調査中に抹消としたため、包含層扱いとする）から出土した須恵器の杯蓋である。カエリと宝珠ツマミをもつタイプである。79はカエリをもつ蓋である。口径10.8cmとごく小型である。外面は灰かぶりのため調整は不明である。カエリは突帯状に退化している。

80・81は立ち上がりのある古墳時代タイプの杯身である。最大径は79とほぼ同じである。80・81とも底部は回転ヘラケズリもしくはヘラ切り不調整である。

82 ～ 85は古墳時代タイプの杯蓋を逆転した形状の系譜を引くと考えられ、平城宮の杯Ａとは異なるタイプの杯である。82の口径は推定復元で、これより小さくなる可能性もある。底部は回転ヘラケズリ。83 ～ 85は口縁部を外反気味につまんで横ナデするために屈曲し、稜椀に類似したタイプである。83の底部は雑なヘラ切り後ナデ。指押さえ痕も残る。胎土は砂粒が多くややざらつく。84も底部はヘラ切り不調整。

86・87は杯蓋である。いずれも天井部が低い扁平なタイプである。86は表面に灰をかぶり自然釉が付着しているため、調整は不明であり、全体になだらかな曲面をなす。87はヘラケズリを行った部分の端で屈曲し、稜線がめぐる。胎土は精良である。

88は杯Ｂである。口径に比して器高が高いやや深めのタイプで、口縁部の外径度はやや高い。底部の高台内側には粘土紐の接合痕がナデ消されずに残っている。胎土はざらつき、やや軟質である。89はいわゆる稜椀である。口縁端部はごく小さく玉縁状に仕上げられ、わずかに外反する。焼成は不良で生焼けに近い。

90は鉢である。半球形に近い形状で底部中央はヘラ切りの後ほぼ一方向にヘラケズリを施し、底部の周辺部は回転ヘラケズリ。口縁端部は単純に丸くおさめ、面取りや玉縁状ではないが、いわゆる金属器模倣の器形といえる。胎土も精良である。91は皿である。口径は21.9cmとやや大型で、口縁部の外傾度が高い、開く器形である。底部から立ち上がりの部分にかけては回転ヘラケズリ。口縁部外面には重ね焼きの痕跡が認められる。胎土は精良できめ細かい。

以上の供膳形態の須恵器は、78 ～ 85が古墳時代末～奈良時代初め、86 ～ 91が奈良時代半ば以降という二時期に大別できる。また胎土が精良なものと、粗雑なものの二種がある。

92 ～ 97は須恵器の壺・甕である。92は提瓶の口縁部と考えられる。93は口縁端部を屈曲させ、やや幅広の凹帯となすタイプの壺の口縁である。94はほぼ直線的に開くが端部付近でわずかに内側に屈曲する壺の口縁部である。内面に灰をかぶっている。95は大きく直線的に開く器形で、広口の壺の口縁か杯もしくは椀の可能性もある。胎土はやや精良。

96の甕の焼成・色調は土師器であり、黒斑もあるが、器形や調整から生焼けの須恵器と判断した。口

縁端部は外側に小さく丸く肥厚する。胴部外面は平行タタキ後ナデ、内面は同心円文の当て具痕が残る。口縁部内面には煤が付着しており、あるいは実際に甕として火にかけて使用したものか。

97は小片のため、口径・傾きとも推測である。口縁端部は方形に整えられ、外面には櫛先列点文が施される。外面は縦方向のハケメの上に２本一組の沈線を２段にめぐらせている。内面は灰をかぶり、ところどころ自然釉が付着している。他に図化していないが、やや雑な波状文を施した甕の口縁部の破片105がある（写真図版14）。

98は円面硯である。外面には自然釉が付着している。脚部に穿たれた透かし穴の一部が認められる。

99は風字硯である。上面は使用により滑らかになっており、墨も付着している。裏面には、欠損するが細長い脚が貼り付けられている。全体に粗いつくりで胎土も粗くざらついている。

瓦（図版12－100、写真図版15－109～112）

100は平瓦である。一隅のみ残存する。端面は１面、側面は２面のケズリを施す。他にも図化していないが、瓦片が出土しており、その中のいくつかを写真のみ掲載した（写真図版15）。いずれも平瓦の小片である。100・109は縄目タタキ、110・111は粗い格子目タタキ。112のタタキは不明である。109は土師質、110・112は須恵質、111は瓦質である。

土錘・製塩土器（図版12－101・102、写真図版14－106～108）

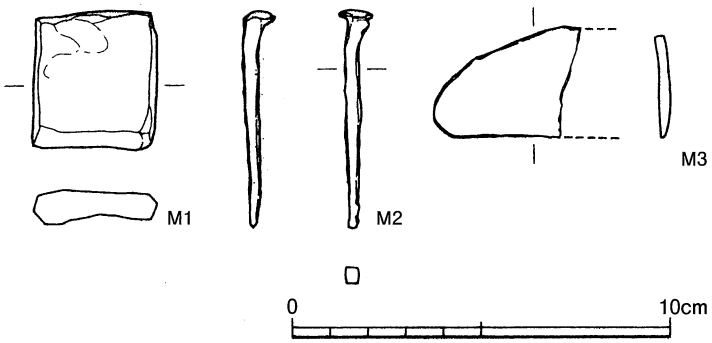
101・102は土錘である。101は端部をわずかに欠く。全体に摩滅しているが、縦方向のナデ調整を行っている。重さは7.3ｇ。102は器壁の残りが悪く調整は不明。重さは5.5ｇ。

106～108は製塩土器である。小片のため図化せず、写真のみ掲載した（写真図版14）。

金属器（第２図Ｍ１～Ｍ３、写真図版14）

いずれも包含層からの出土である。

Ｍ１は平面形がほぼ方形の不明品である。Ｍ２は釘である。頭部は逆台形に広くなっている。体部の断面は方形である。Ｍ３は鎌の先と考えられるが、刃は残っていない。



第２図　鉄器

第４章　まとめ

第１節　古墳時代後期～奈良時代

見つかった遺構は、炉跡とそれに付随する土坑（SX07)・ピット群（Ｐ18～Ｐ20、Ｐ24～Ｐ33）の他、大小の土坑（SK03～05、SX03～06)、溝（SD02）などがある。出土した遺物は飛鳥時代～奈良時代を中心に、一部古墳時代（６世紀末）に遡るものを含む。

１　遺構

２～３区の炉跡、土坑SX07、10数個のピット群を１つのまとまりとしてとらえ、何らかの生産に関わる遺構群と考えたが、生産物を示す遺物はなく、性格・用途については不明である。

５区の土坑（SX04）は径3.3m×3.7m、深さ40cmという規模の大きな掘り込みで、巨礫が落ち込んでいた。特徴的な遺構ではあるが、これについても用途は明らかにできなかった。

２　遺物

出土遺物の中で、SX07からは６世紀末の須恵器が出土しており、今回検出した遺構の中で、最も古い年代を示す。

他の土坑群などからは７世紀～８世紀代を中心とする須恵器・土師器が出土した。特に土師器は、暗文をもつ杯やカマド・把手付き鍋など、国府関連の豆腐町遺跡などと同じ様相を示している。

他に特徴的な遺物としては、円面硯・風字硯・瓦・製塩土器などがある。

第２節　平安時代

見つかった遺構は、掘立柱建物SB01・02、土坑SK02・05などがある。出土した遺物は平安時代後期のもので、11世紀～12世紀中頃までのものを含む。

１　遺構

掘立柱建物SB01からは時期を示す遺物は得られなかったが、方向性が一致するところから、SB02と同時期とみてよい。いずれの建物も調査区の端にかかっていて、全体の規模は検出できなかった。

２区の土坑SK02・05は浅い掘り込みで、須恵器・土師器の供膳形態が出土した。

２　遺物

SK02の出土遺物が最もまとまった資料で、見込みの凹みが強い平高台の椀で、大小の法量差がある。しかし沈線椀は認められず、11世紀末～12世紀初ころのものと考えておく。

SB02の柱穴から出土した椀の底面は回転ヘラ切りで、SK02よりさかのぼる時期の可能性がある。

包含層から出土した須恵器椀・土師器皿類は、12世紀代のもので、存続年代の下限を示すものとみられる。

第３節　結語

高木遺跡は今回が初の本発掘調査で、古墳時代後期～奈良時代（６世紀末～８世紀）と平安時代（11世紀～12世紀）の遺構・遺物が見つかった。

遺跡は砂礫で構成された中洲状の微高地に立地しており、調査地点の南北では遺構が見つかっていないため、比較的狭い範囲に残存したものと考えられる。古墳時代後期～奈良時代については何らかの生産に関わる施設が、平安時代には小規模な建物が設けられたようであるが、いずれにしても集落の中心部分であったとはいえず、周辺に居住域を含む集落本体が存在するのであろう。

出土した遺物の中には瓦・陶硯が含まれており、約500m北に位置する小川廃寺との関わりを窺うことができる。第１章でも触れたように、この地域は、播磨国風土記飾磨郡の条に記載される「少川（小川）里」の遺称地とされている。今回の発見だけで速断はできないが、この調査結果は、当時の里の状況をいくらかでも反映したものと、評価することができる。

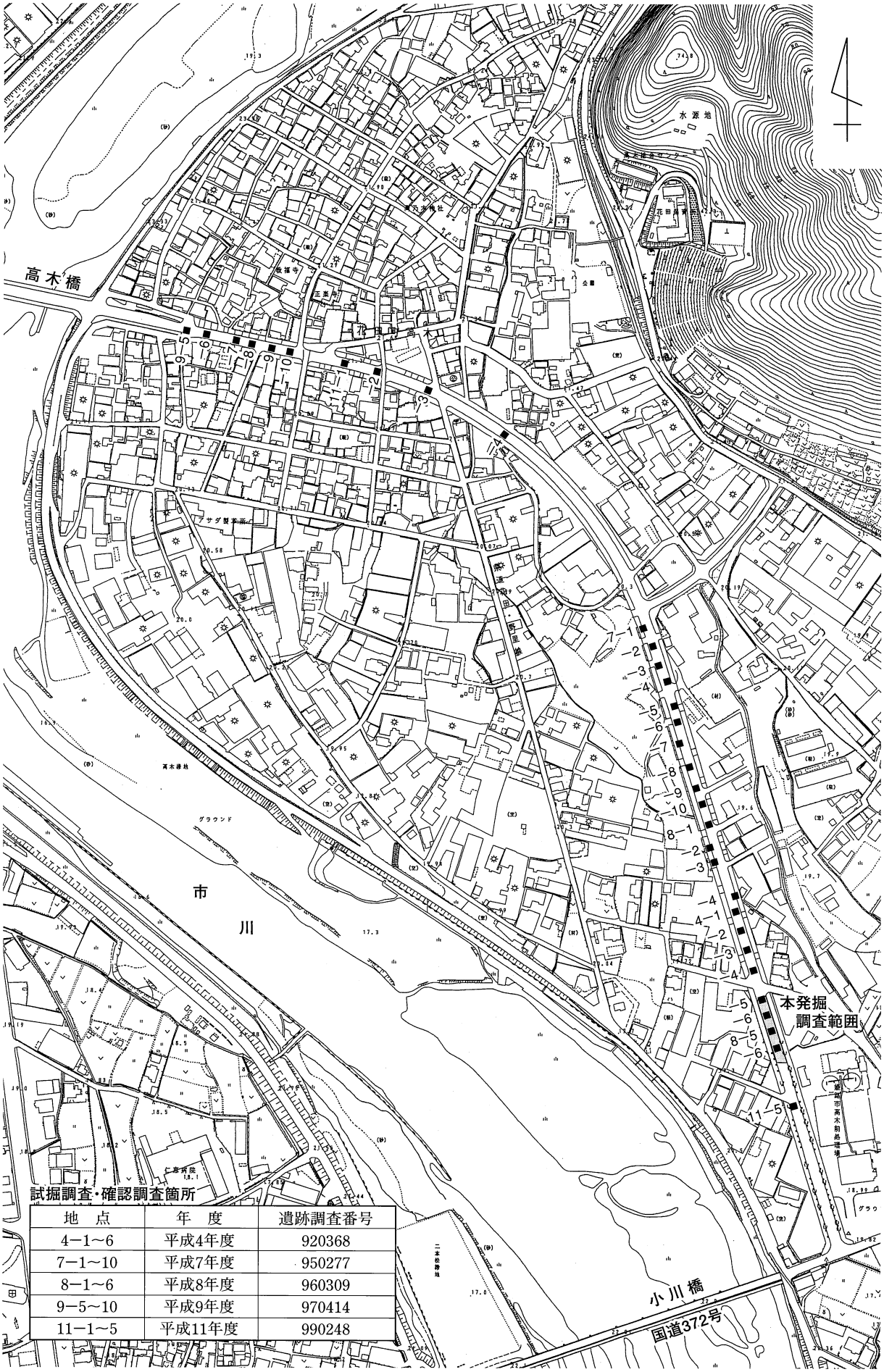
表3　遺物一覧表

報告番号	種別	器種	法量（cm、g）				残存	出土地区	出土遺構	層位	備考
			口径	器高	底径	重量	口縁				
			長さ	幅	厚み						
1	須恵器	椀	(11.8)	(2.75)			口縁部	5区	P04		
2	土師器	椀		(1.9)	(4.3)		底部：ほぼ完形（端部わずかに残）		P03		
3	土師器	椀	(12.4)	(2.0)			1/13	2区	P12		
4	土師器	甕	(13.1)	(7.4)			口縁部～頸部1/3弱	2区	P33		
5	須恵器	甕	(20.05)	(4.75)			1/6弱	2区	P19		
6	須恵器	杯蓋	(13.1)	4.25			3/4強	2～3区	SX07		土器№1
7	須恵器	杯	(11.9)	(3.1)			1/5強	2～3区	SX07		
8	須恵器	杯	10.7	3.3			完形	2～3区	SX07		土器№2
9	須恵器	まり	(8.4)	(4.31)			1/4弱	2～3区	SX07		
10	土師器	甕	(20.6)	(2.5)			1/12強	2～3区	SX07		
11	須恵器	杯蓋	(11.9)	(2.6)			1/15	5区	SX04		アゼの南東側一段下げ
12	須恵器	杯	11.1	3.95	6.05		3/4	5区	SX04	上層	アゼ西側
13	須恵器	杯蓋		(1.5)			つまみのみ	5区	SX04		トレンチ西一段下げ
14	須恵器	杯蓋	(11.0)	(2.25)			1/6	5区	SX04	第2層（焼土付近）	
15	須恵器	高杯		(2.4)	(9.6)		脚部のみ	5区	SX04		アゼの南東側一段下げ
16	土師器	杯	(15.0)	(4.3)			1/10	5区	SX04	上層（炭層）	東西トレンチ北側　南北トレンチ東
17	土師器	杯	(15.6)	(5.05)			1/2強	5区	SX04	③層	アゼ外し時
18	土師器	甕	(17.4)	(5.2)			1/8弱	5区	SX04	③層	アゼ外し時
19	土師器	甕		(5.2)			頸部の破片	5区	SX04	第2層（焼土付近）	
20	土師器	甕	(20.2)	3.15			1/6強	5区	SX04		アゼの南東側一段下げ
21	須恵器	椀	(12.9)	4.7	(5.0)		1/7、底部1/5	2区	SK02		
22	須恵器	椀	(14.0)	(6.1)	5.7		1/20、底部完形	2区	SK02		
23	須恵器	椀	(14.8)	4.8			1/26、体部1/3	2区	SK02		
24	土師器	椀	11.1	4.6	5.3		1/3、底部2/3	2区	SK02		
25	土師器	椀	(12.1)	4.55	5.9		1/8、底部9/10	2区	SK02		
26	土師器	杯	(13.1)	(3.5)	(8.6)		1/2弱、底部2/3	2区	SK05		
27	土師器	甕	13.8	8.9			3/4	5区	SX03		アゼ
28	土師器	高杯		(7.15)			脚部のみ	5区	SX03		アゼ
29	土師器	鍋？		(7.0)			把手とその周辺	5区			SX03横の側溝
30	土師器	杯	(13.2)	(4.1)			若干	4区	SX06		
31	土師器	杯	(12.4)	(4.2)			1/4	4区	SX06		
32	土師器	杯	(18.8)	(3.5)			1/12弱	4区	P22		SX06内
33	土師器	杯	(17.8)	(2.9)			口縁部	4区	P22		SX06内
34	土師器	鍋？		(3.8)			把手のみ	4区	SX06		
35	須恵器	杯		(2.25)			受の口縁部1/8	4区	SX05		南東側
36	土師器	杯	(12.8)	(4.2)			1/6	4区	SD02		
37	土師器	杯	(17.5)		6.1		1/4	3区	SD02		あぜ東側
38	土師器	椀		(4.3)	(9.8)		底部1/3	4区	SD02		
39	土師器	甕		(3.1)			破片	4区	SX05		
40	土師器	甕	(20.6)	(29.2)	(25.1)		1/2弱、体部1/3弱				
41	土師器	鍋？	腹(24.3)	(12.1)			把手部分のみ	3区	SX05		
42	土師器	杯	14.7	5.4			口縁部1/8弱	2区			東側溝
43	土師器	杯	(15.5)	6.3	丸底		1/6	5～6区		包含層	側溝掘削時
44	土師器	杯	(13.9)	3.25	(10.6)		1/8、底部1/3	3区		包含層	攪乱より北側の西
45	土師器	杯	(14.4)	(3.35)	(11.5)		1/4、底部1/3	3区		包含層	攪乱より北側の西
46	土師器	杯	(14.9)	3.3	(10.7)		1/3	4区西側		包含層	1個体
47	土師器	杯	(16.5)	2.7	(15.0)		1/24	4区		包含層	1段上がった面
48	土師器	杯	(16.5)	3.65	(12.1)		1/9、底部	3区		包含層	攪乱より北側の西
49	土師器	鉢	(25.8)	(4.9)			1/14	3区		包含層	攪乱北側一段下げ（東）
50	土師器	鉢	26.0	(4.2)			1/12	4区			真ん中のおち
51	土師器	鉢	(30.7)	(7.7)			1/12	4区		包含層一括	機械掘削
52	土師器	甕	(13.8)	3.3			1/5	6区	SK02（？）		包含層扱いとする
53	土師器	甕	(15.1)	(2.8)			1/4	3区		包含層	攪乱より北側の西
54	土師器	甕	20.5	6.4			1/15	3区		下層包含層	
55	土師器	甕		(11.9)			口縁部なし	4区西側		包含層	
56	土師器	甕	26.0	(16.8)			1/4弱	5～6区		包含層　下層	
57	土師器	甕	(22.7)	(8.0)			1/24弱	5～6区		包含層　上層	
58	土師器	鍋？					把手のみ	2区		包含層　上層	
59	土師器	鍋	(19.6)	3.0			1/11	3区		包含層　上層	
60	土師器	鍋	(29.6)	(8.0)			1/8	4区		包含層　下層	

報告番号	種別	器種	法量（cm、g）				残存	出土地区	出土遺構	層位	備考
			口径	器高	底径	重量	口縁				
			長さ	幅	厚み						
61	土師器	鍋	(37.9)	(5.85)			1/12	4区			真ん中のおち
62	土師器	甑	不明					2区		包含層（下層）	
63	土製品	かまど	(30.7)	7.75			約1/9	3区		包含層	攪乱北側の西
64	土製品	かまど		16.25	中4.5.8.3		左右下部のみ	5区		包含層　下層	
65	土師器	羽釜	26.9	9.0			1/16	2区（西端）		包含層	
66	土師器	小皿	(8.8)	(1.3)	7.7		1/3、底部1/2弱	3区			西側溝（南側）
67	土師器	小皿	8.5	1.55	5.4		1/2強、底部7/8	6区南端	№6Eの抗から西へ4m付近	包含層　上層	小皿など一括
68	土師器	小皿	(8.4)	1.6	(5.6)		1/3、底部1/2強	3区			西側溝（南側）
69	土師器	小皿	(8.5)	1.4	6.4		口縁部～底部3/4	6区南端	№6Eの抗から西へ4m付近	包含層　上層	小皿など一括
70	土師器	小皿	9.5	2.35	6.0		1/2、底部2/3	1区（西側）		包含層（上層）	
71	土師器	小皿	(9.2)	2.1	5.4		1/2弱				
72	土師器	小皿	9.5	1.8	5.8		1/2強	2区		包含層	
73	土師器	小皿	(9.3)	2.5	5.5		1/2強	2区（西端）		包含層	
74	土師器	皿	(13.8)	1.95	9.75		1/8、底部1/5	3区			西側溝（南側）
75	土師器	托		3.0	7.5		底部全て残存	2区（西端）		包含層	
76	土師器	托		(2.4)	(6.7)		底部一部剥離	2区		包含層	
77	須恵器	椀	15.3	6.1	6.1		2/3弱	5～6区		包含層　下層	
78	須恵器	杯蓋	(8.9)	(2.35)			口縁わずか体部1/4、	5区	P07		包含層扱い
79	須恵器	杯蓋	(10.8)	(1.9)			1/3弱	5区		包含層　下層	
80	須恵器	杯	(10.2)	(3.1)			1/3	5～6区		包含層　上層	
81	須恵器	杯	10.05	3.3			1/4（端部欠損）	4区		包含層　下層	
82	須恵器	杯	(10.9)	(3.3)			1/36	2区		包含層（上層）	
83	須恵器	杯	(10.8)	(2.65)	5.7		1/26、体部1/4	3区		包含層	東の側溝付近　面検出
84	須恵器	杯	(10.9)	2.7	(6.6)		1/11、底部1/6	3区		包含層	攪乱北側一段下げ（西）
85	須恵器	杯	(11.3)	3.6	5.7		わずか、底部完形	3区		包含層	攪乱北側のまん中
86	須恵器	杯蓋	(15.8)	(1.7)			1/6弱	3区		包含層	攪乱より北側の西
87	須恵器	杯蓋	(16.35)	1.7			口縁部	2区			面精査
88	須恵器	杯	(15.3)	5.7	(9.4)		1/4強	5～6区		包含層　上層	
89	須恵器	稜椀	(17.2)	(4.9)			1/12弱	5区		包含層　上層	
90	須恵器	鉢	(15.6)	8.1	(9.4)		1/7、底部1/4	3区		包含層	攪乱北側の西
91	須恵器	皿	(21.9)	(2.3)	(17.9)		口縁部～底部1/6	3区		包含層	攪乱より北側の西
92	須恵器	提瓶	(5.0)	(4.0)			1/6	1区	攪乱1（基礎）	砂礫層	
93	須恵器	壺		(5.4)			口頸部4/5のみ	3区		包含層（下層）	
94	須恵器	壺	(9.2)	4.35			1/6	5区			P05　P06　P07付近のトレンチ
95	須恵器	壺	(13.9)	(3.7)			1/15	3区			東側溝
96	須恵器	甕	(19.4)	18.8			1/4弱	5～6区		包含層　下層	
97	須恵器	甕	28.9	5.7			1/8	3区		包含層	攪乱北側の西
98	須恵器	円面硯	(17.1)	(3.45)			1/9			壁そうじ	
99	須恵器	風字硯	(9.5)	(5.05)	(3.05)		1/4弱	7区		包含層	
100	瓦	平瓦（1隅）	(9.35)	中(7.6)	1.9			5～6区		包含層　上層	
101	土製品	土錘	5.45	1.15	1.1	7.3	一部欠損	6区		包含層　上層	
102	土製品	土錘	4.41	1.05	1.05	5.5	完形	5区			側溝掘削時
103	土師器	甑		実測省略			底部のみ	5区	P07		包含層扱い
104	土師器	長胴甕		実測省略			胴部のみ	3区	炉跡		炉の西側・包含層
105	須恵器	甕		実測省略			わずか	6区		包含層　上層	
106	土師器	製塩土器		実測省略				4区			
107	土師器	製塩土器		実測省略				2区西端		包含層　上層	
108	土師器	製塩土器		実測省略				6区		包含層　上層	
109	瓦	平瓦（1隅）		実測省略				7区北半		包含層	
110	瓦	平瓦		実測省略				5～6区		包含層　上層	
111	瓦	平瓦（1隅）		実測省略				7区南半		包含層	
112	瓦	平瓦（1隅）		実測省略				6区		包含層　上層	
			長さ	幅	厚み						
M1	鉄製品	不明	3.7	3.25	0.95			1区西側		包含層　上層	
M2	鉄製品	釘	5.8	0.9	5.8			5～6区		包含層　下層	
M3	鉄製品	鎌	2.9	(3.85)	0.3			5区		包含層　下層	

図　版

確認調査と本発掘調査の位置図(1/5,000)

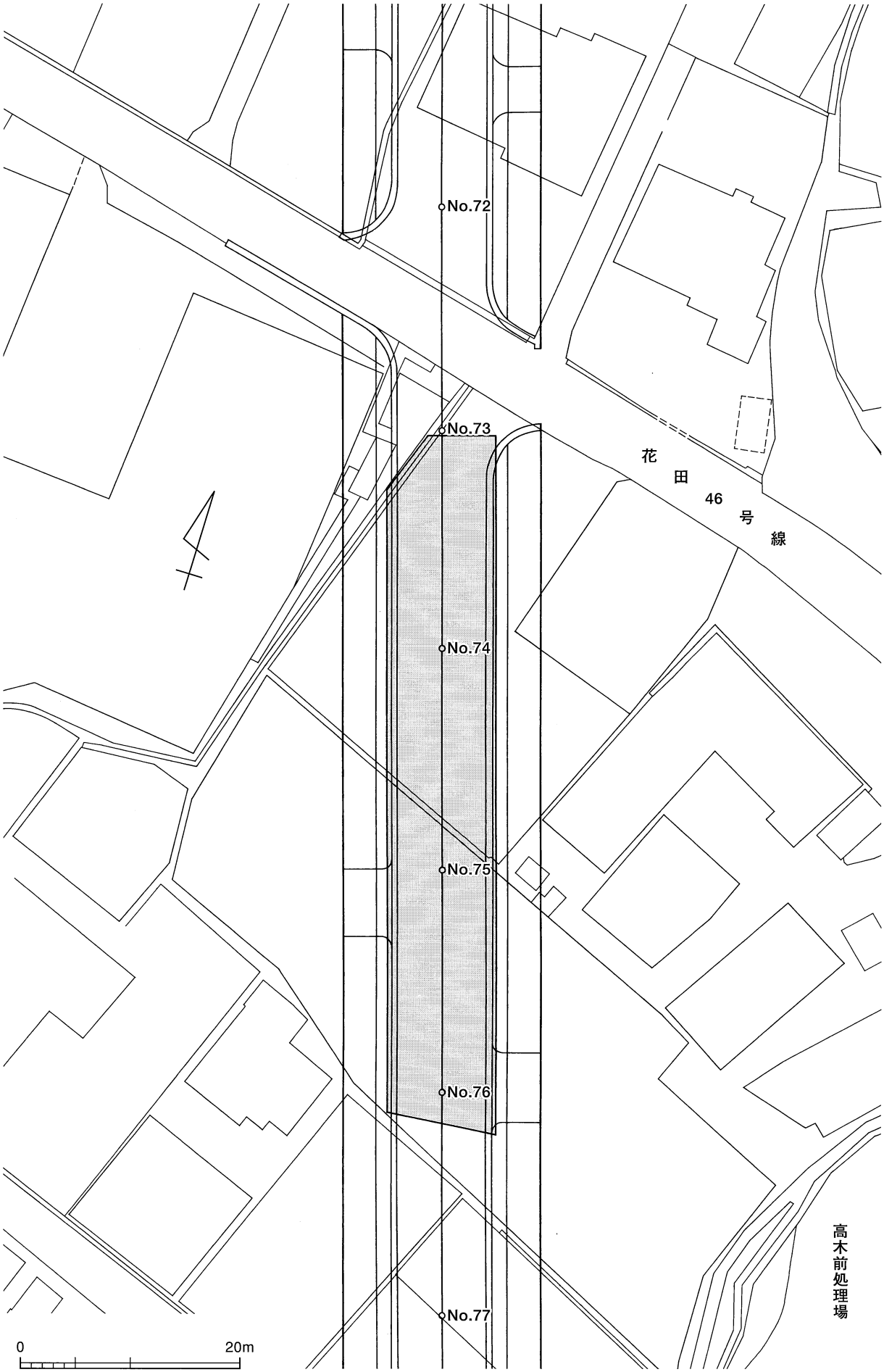


試掘調査・確認調査箇所

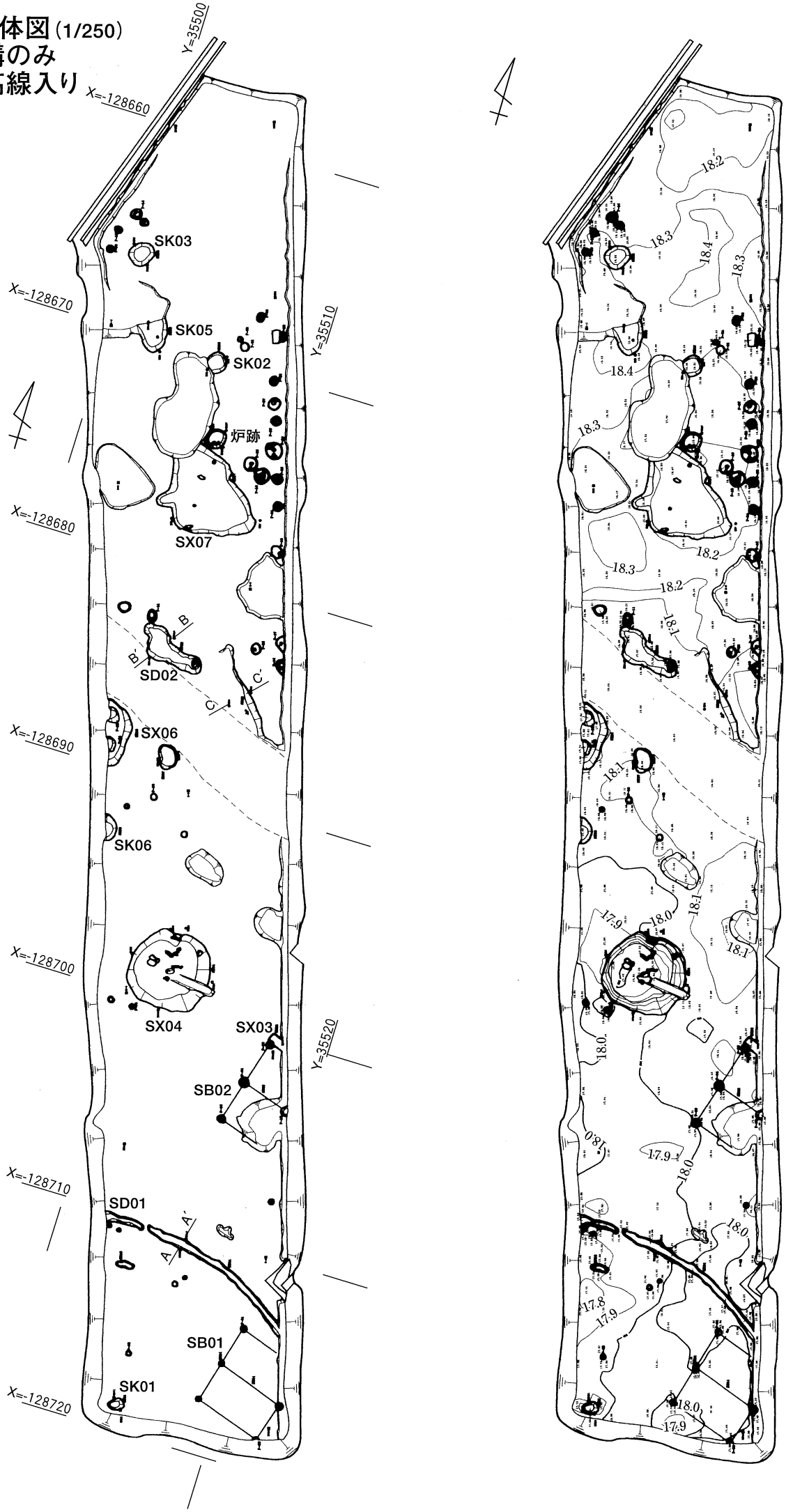
地　点	年　度	遺跡調査番号
4−1〜6	平成4年度	920368
7−1〜10	平成7年度	950277
8−1〜6	平成8年度	960309
9−5〜10	平成9年度	970414
11−1〜5	平成11年度	990248

図版2

調査区位置図(1/500)

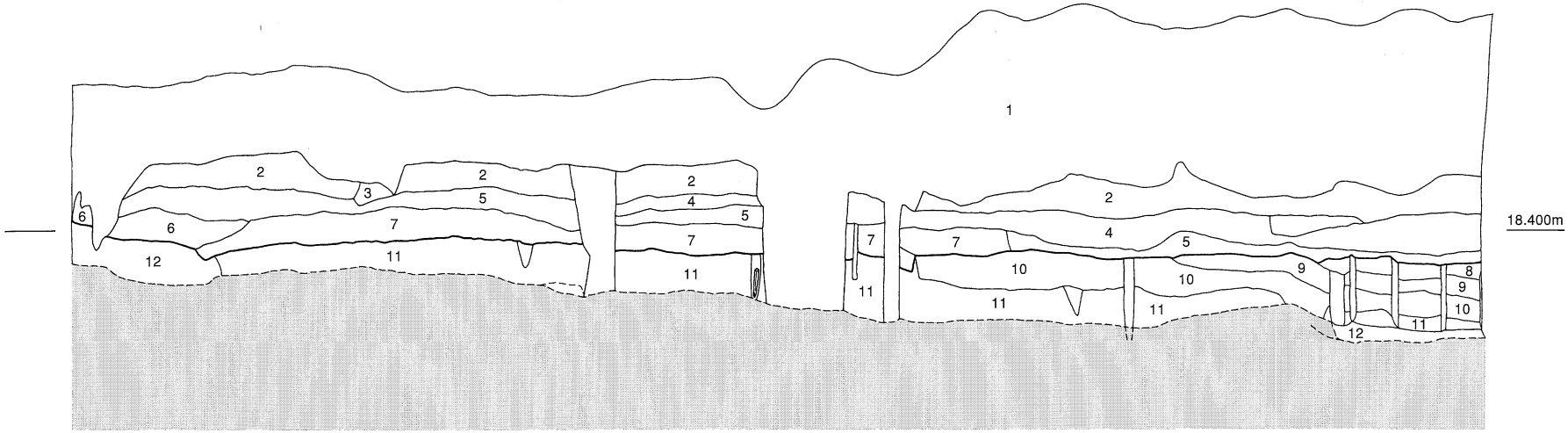


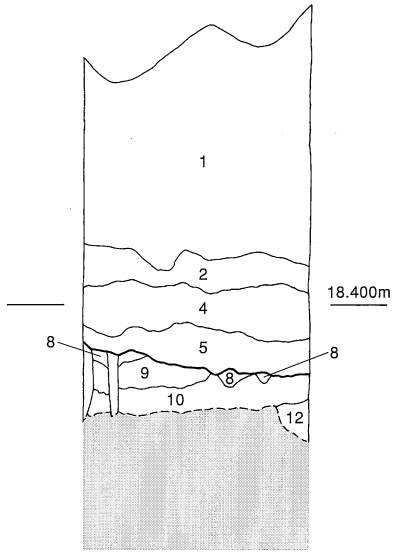
遺構全体図(1/250)
左 遺構のみ
右 等高線入り



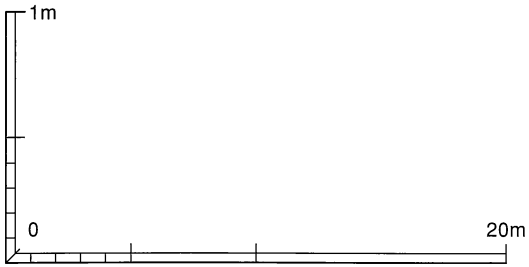
図版4

調査区断面図（縦1/30、横1/300）

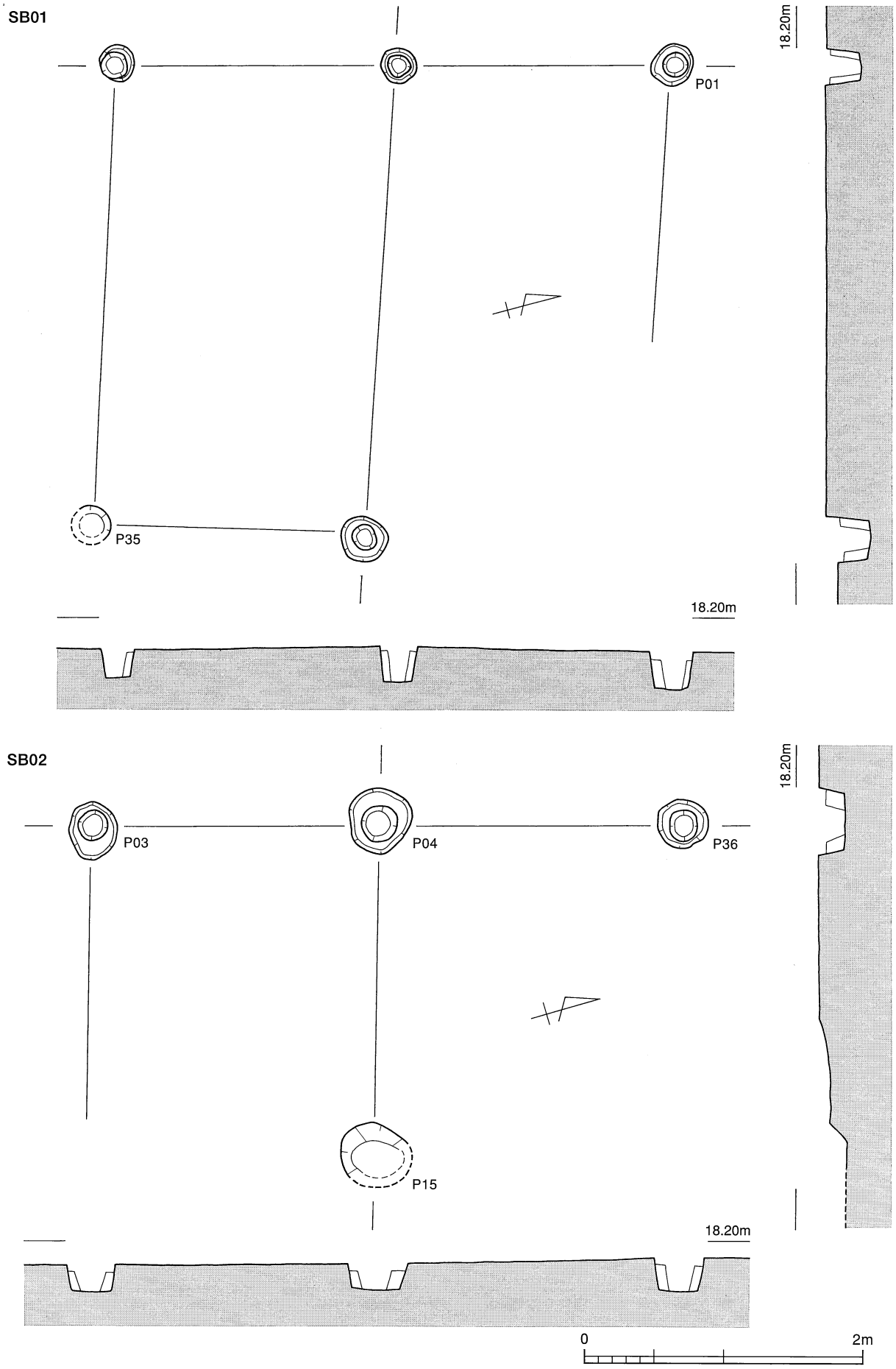




1	盛土	
2	5Y3/2オリーブ黒	シルト質極細砂（耕土）
3	2.5Y4/2暗灰黄	細砂～中砂。細礫含む
4	2.5Y4/3オリーブ褐	シルト混じり極細砂。灰色ブロック含む。下部に細礫含む。土器、Fe_2O_3、Mn
5	2.5Y5/2暗灰黄	シルト～中砂。細礫～大礫含む。土器、Fe_2O_3（床土）
6	5Y4/2灰オリーブ	中砂～粗砂。中礫含む
7	10YR3/3暗褐	中砂～粗砂。細礫～中礫含む。Mn
8	2.5Y5/2暗灰黄	シルト混じり極細砂～中砂。細礫含む。Mn
9	2.5Y4/2暗灰黄	シルト混じり極細砂～中砂。灰色シルトブロック含む。土器、Mn
10	2.5Y4/2暗灰黄	シルト混じり細砂～粗砂。細礫含む。土器、Fe_2O_3、Mn
11	10YR5/3にぶい黄褐	暗灰シルトブロックレンズ状に含む。Fe_2O_3、Mn
12	10YR4/4褐	細砂～粗砂。下部は砂礫層

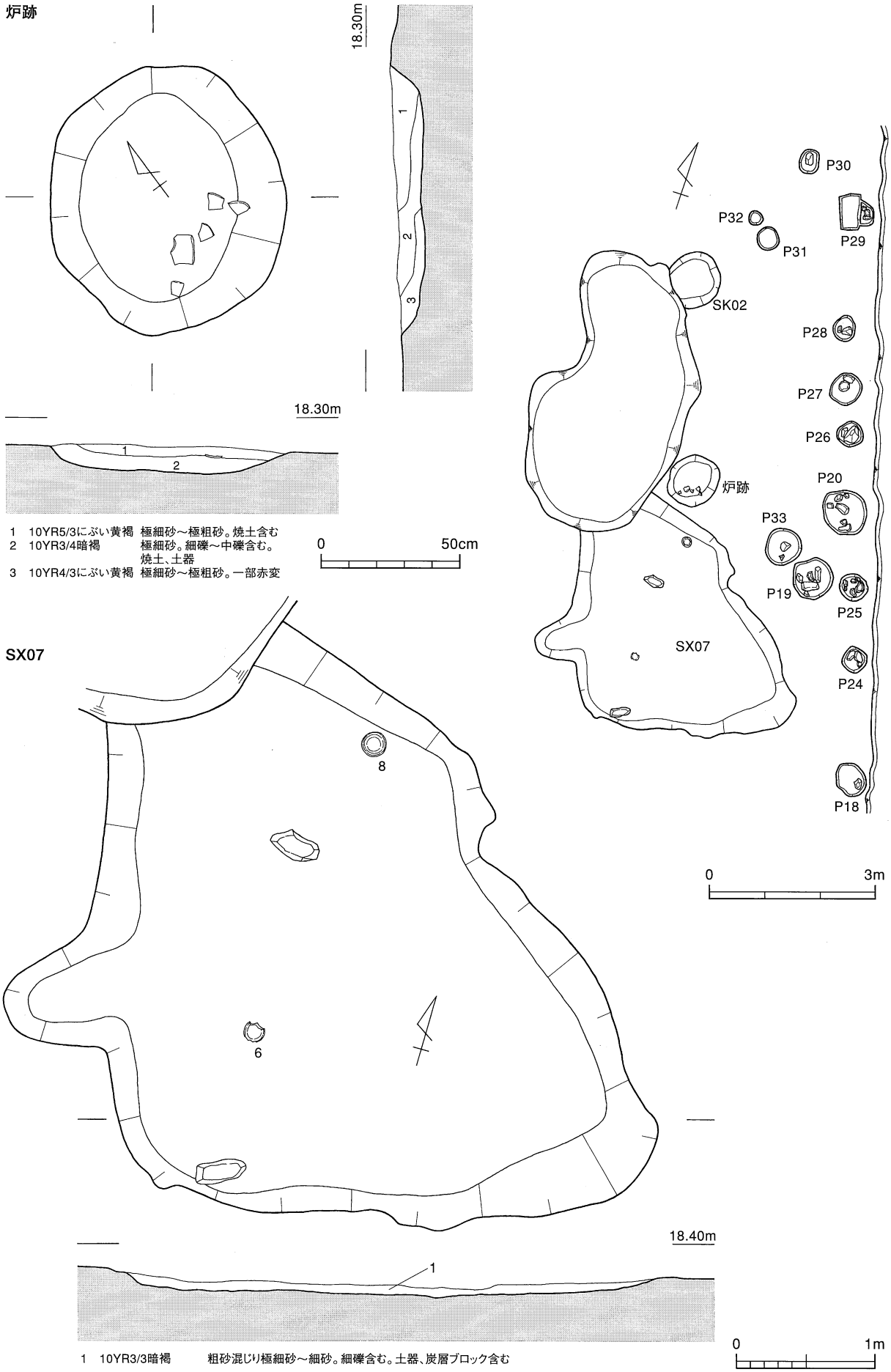


掘立柱建物SB01～02



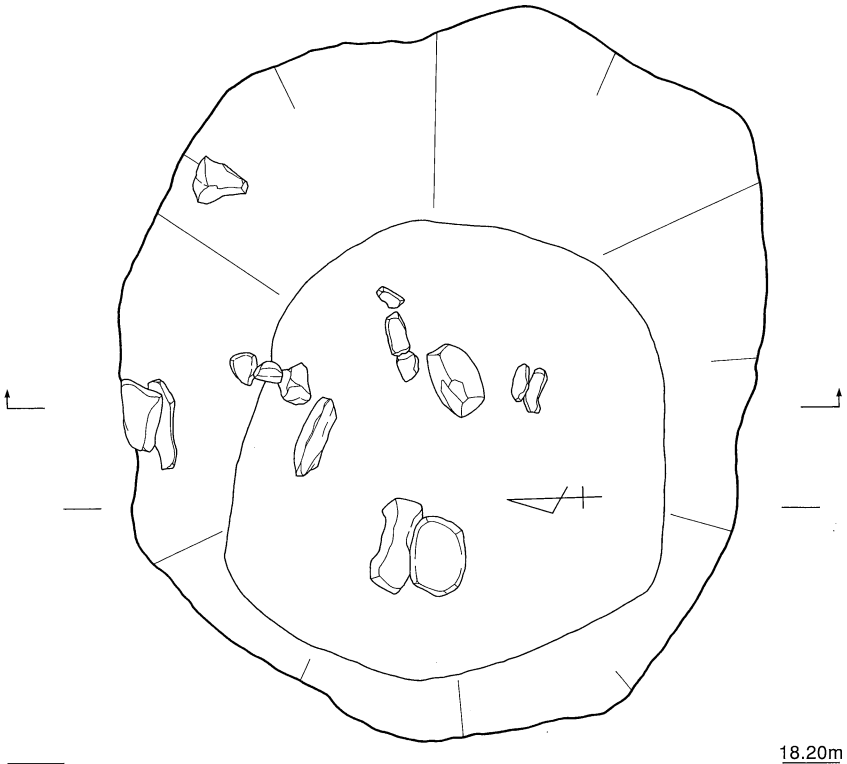
図版6

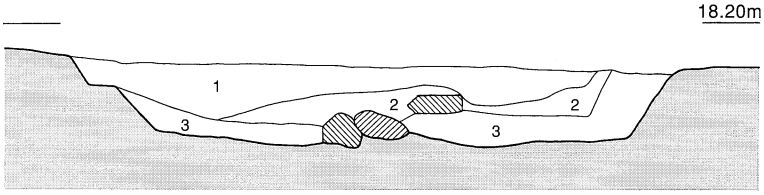
炉跡遺構


炉跡
18.30m
1
2
3
18.30m
1
2
1　10YR5/3にぶい黄褐　極細砂～極粗砂。焼土含む
2　10YR3/4暗褐　極細砂。細礫～中礫含む。焼土、土器
3　10YR4/3にぶい黄褐　極細砂～極粗砂。一部赤変
0
50cm
P30
P32
P31
P29
SK02
P28
P27
P26
炉跡
P20
P33
P19
P25
SX07
P24
P18
0
3m
SX07
8
6
18.40m
1
1　10YR3/3暗褐　粗砂混じり極細砂～細砂。細礫含む。土器、炭層ブロック含む
0
1m

土杭・溝

SX04

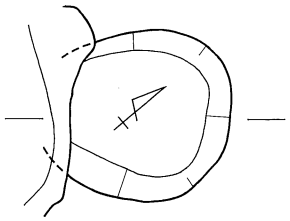


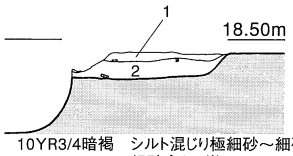


1 7.5YR3/4暗褐
中砂～粗砂。細礫～大礫含む。土器
2 7.5YR3/2黒褐
中砂。中礫～大礫含む。炭、焼土
3 10YR3/4暗褐
粗砂。中礫～大礫含む

0 2m

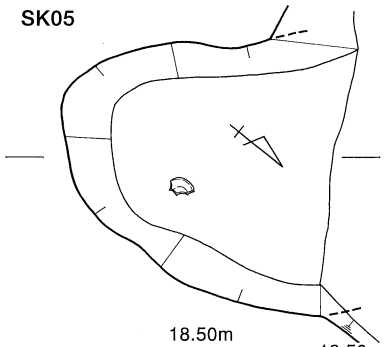
SK02

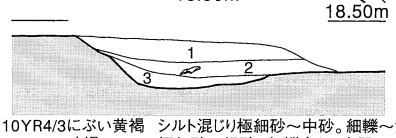




1 10YR3/4暗褐 シルト混じり極細砂～細砂。粗砂含む。炭、Mn
2 10YR3/3暗褐 シルト混じり極細砂～中砂。細礫含む。土器、炭

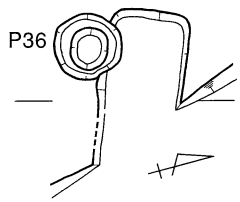
SK05

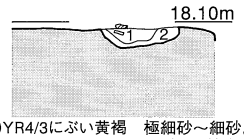




1 10YR4/3にぶい黄褐 シルト混じり極細砂～中砂。細礫～大礫含む
2 10YR3/3暗褐 極細砂～粗砂。細礫含む。土器
3 10YR3/3暗褐 極細砂～細砂。粗砂～細礫含む。炭

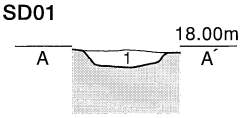
SX03





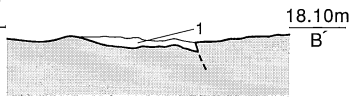
1 10YR4/3にぶい黄褐 極細砂～細砂。土器、焼土
2 10YR4/4にぶい黄褐 極細砂～細砂

SD01



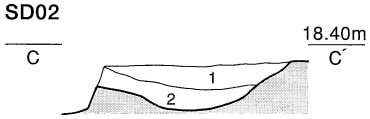
1 7.5YR4/4褐 シルト混じり細砂～中砂

SD02



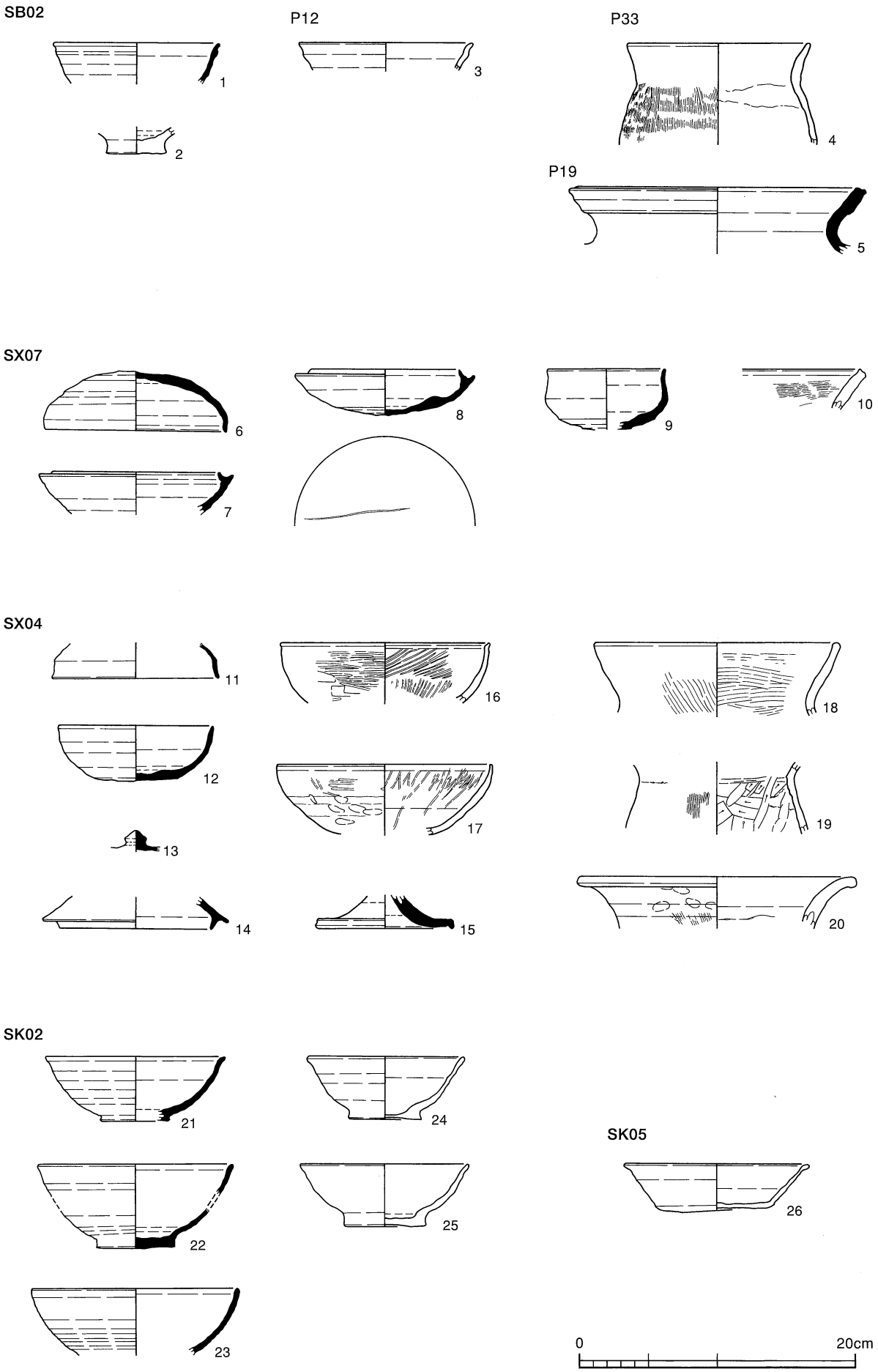
1 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂混じり極細砂～細砂。細礫含む
2 10YR4/4褐 細砂～極粗砂。細礫含む。土器

SD02



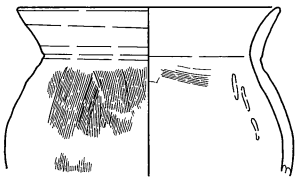
図版8
1-26

土器(1)

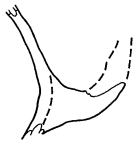

SB02
1
2
P12
3
P33
4
P19
5
SX07
6
7
8
9
10
SX04
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
SK02
21
22
23
24
25
SK05
26
0
20cm

土器(2)

SX03

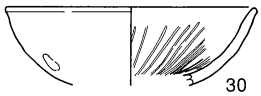

27

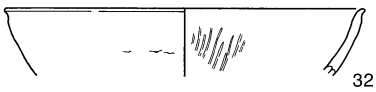
28

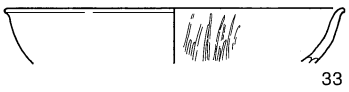


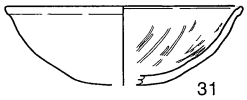
29

SX06


30

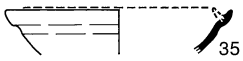

32

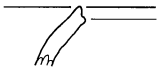

33

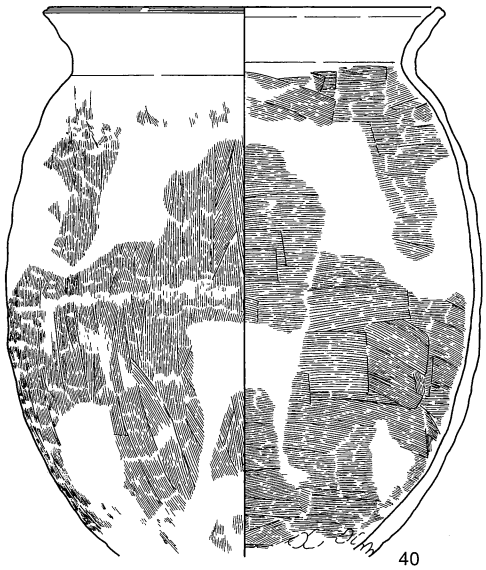

31

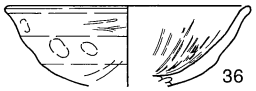
34

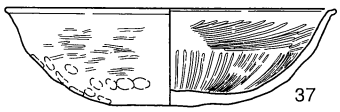
SD02


35

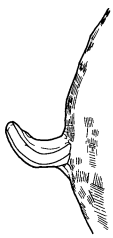

39

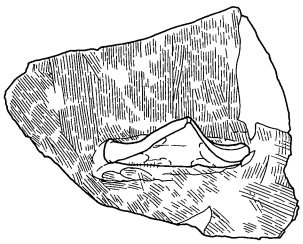

40


36


37

38



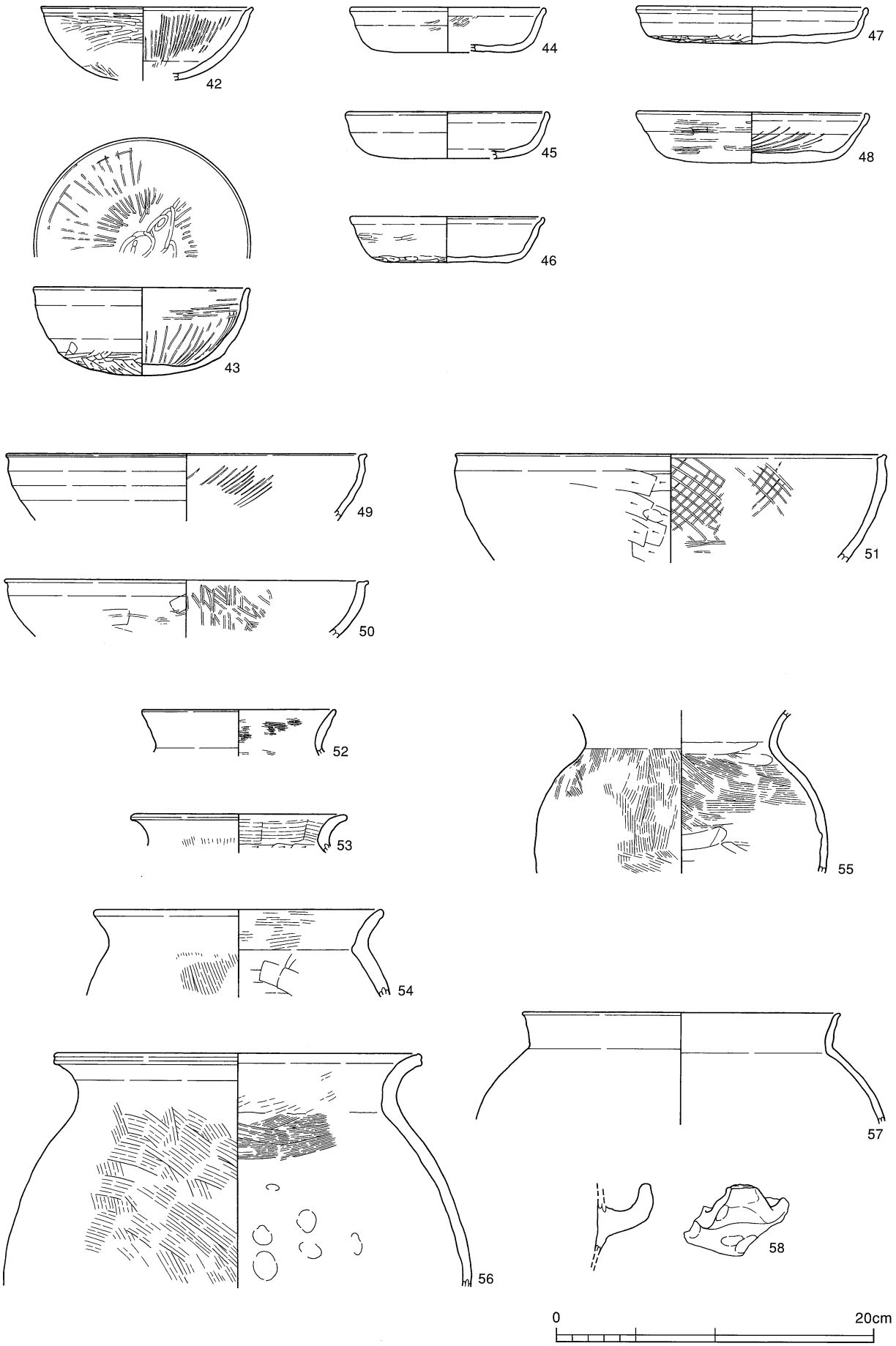

41

0 20cm

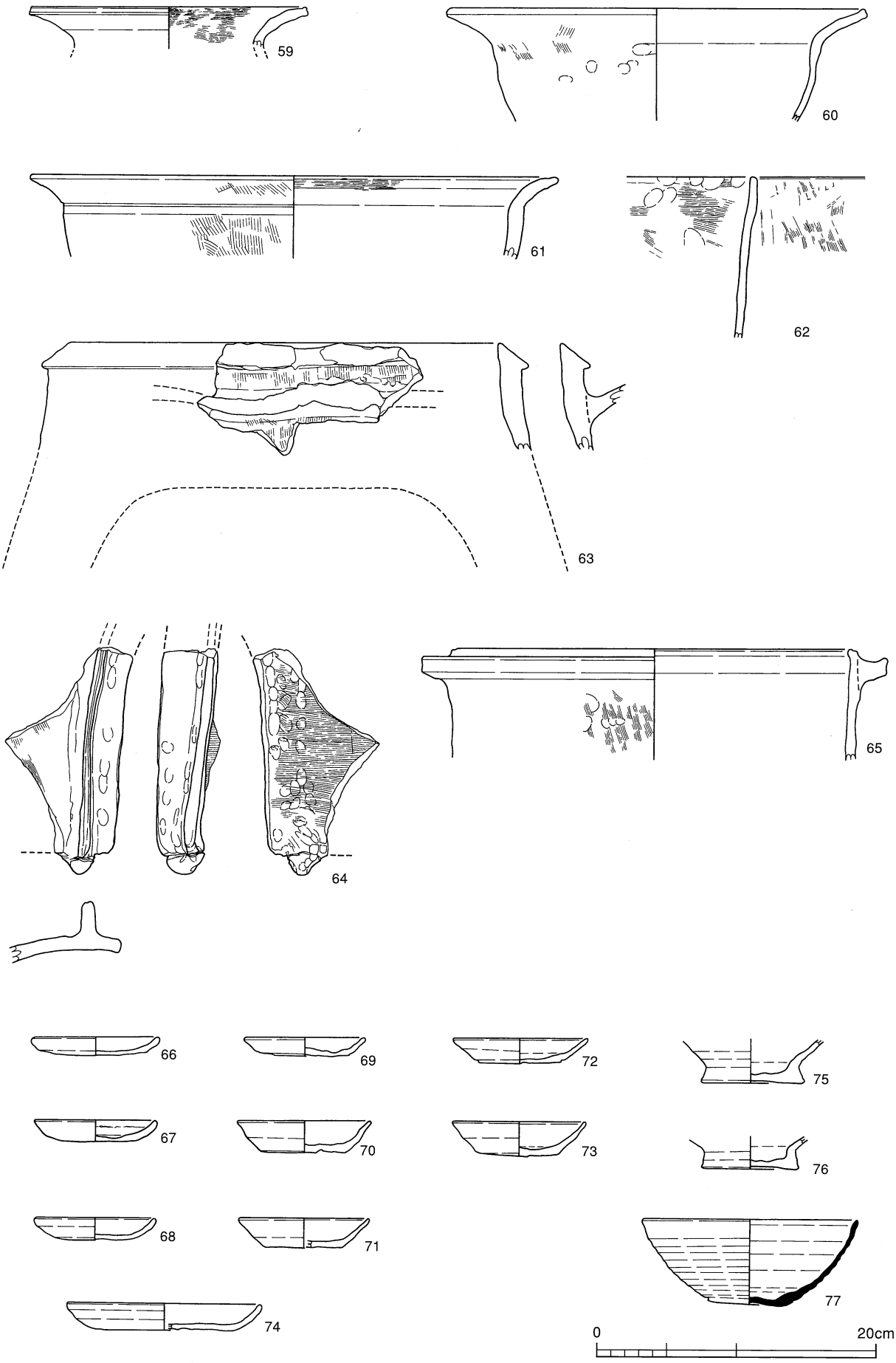
図版10
42-58

土器(3)

包含層

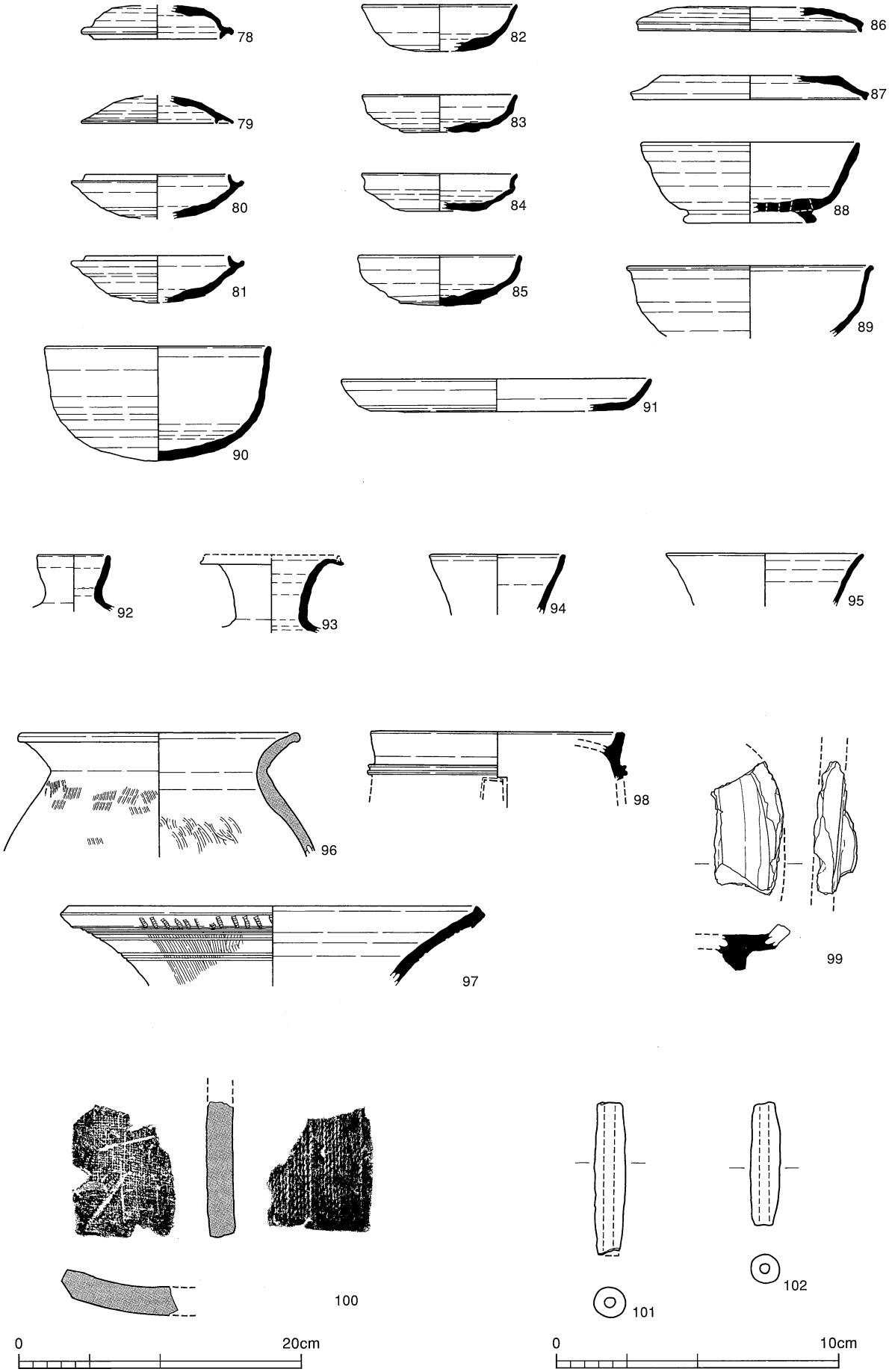


土器(4)



図版12
78-102

土器(5)



1　遺跡遠景（南から）

2　同上（西から）

航空写真

調査区全景（真上から）

1　調査区全景（北から）

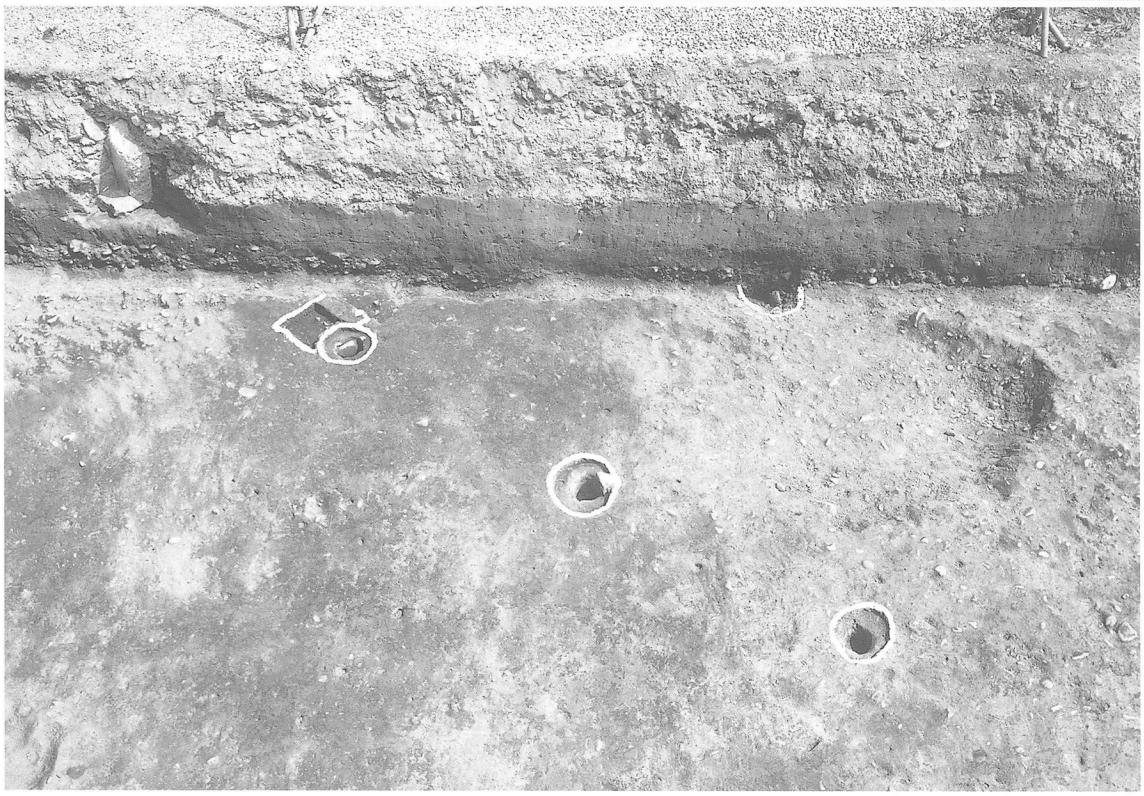
2　東壁断面　2区付近

遺構(2)

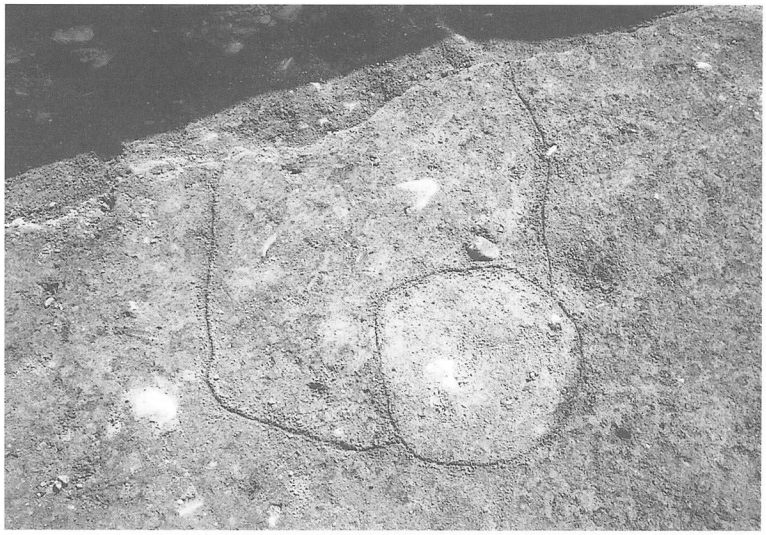
1　調査区全景(南から)

2　東壁断面　8区付近

1　掘立柱建物SB01
（北西から）



2　掘立柱建物SB02
（西から）



3　SB02のP36と土坑SX03の
切り合い関係（北西から）

遺構(4)

1　2区の炉跡、
落ち込み、
ピット群(北から)

2　同上(西から)

3　柱穴P29断ち割り断面(西から)

1　炉跡(南から)

2　SX07土器検出状況(南から)

3　炉跡断面(北から)(左下)

4　SX07出土須恵器杯(右下)

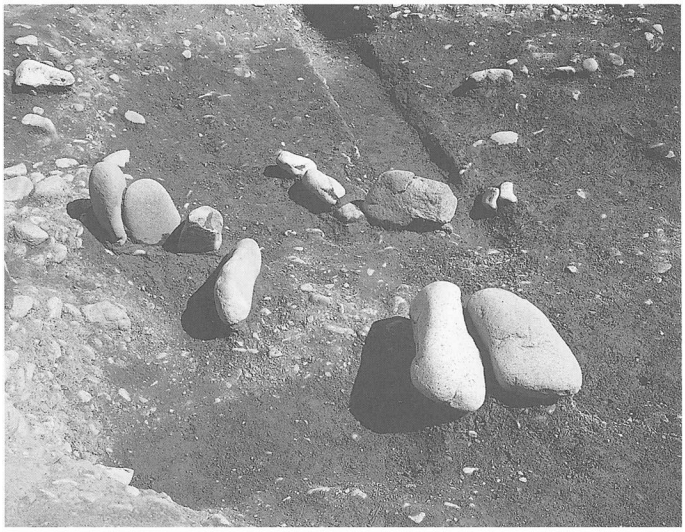
遺構(6)

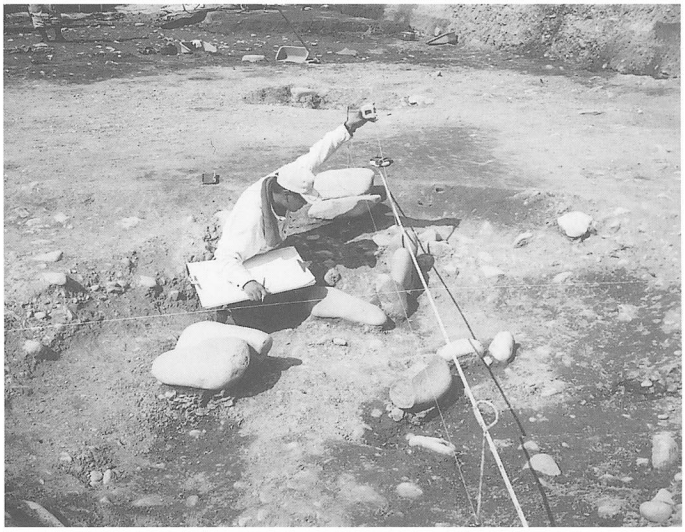
1　土坑SX04全景
（西から）

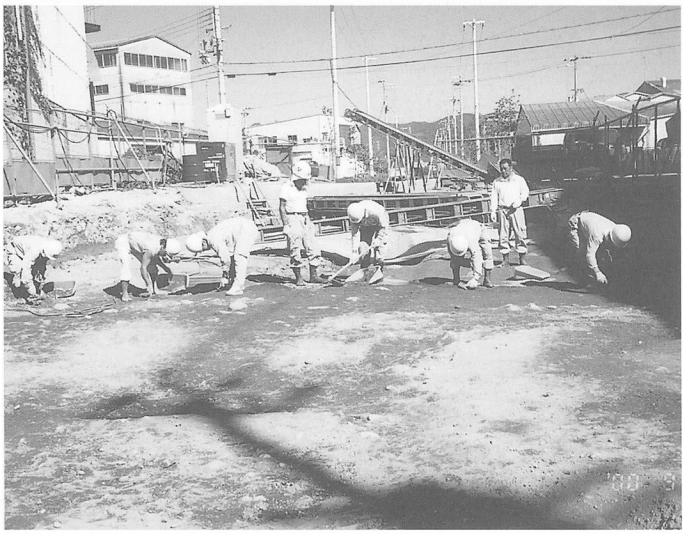
2　同上　断面（西から）

3　同上　全景（南から）

1　土坑SK02断面(南東から)　(1段目右)
2　土坑SX04礫群(西から)　(2段目左)
3　同上　実測状況　(2段目右)
4　機械掘削　(3段目左)
5　人力堀削　(3段目右)
6　現地説明会　(4段目左)
7　同左　(4段目右)







土器(1)

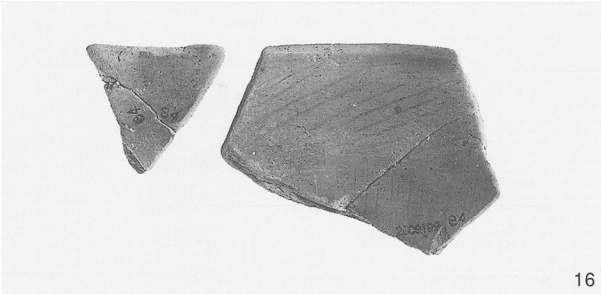
6

8

12

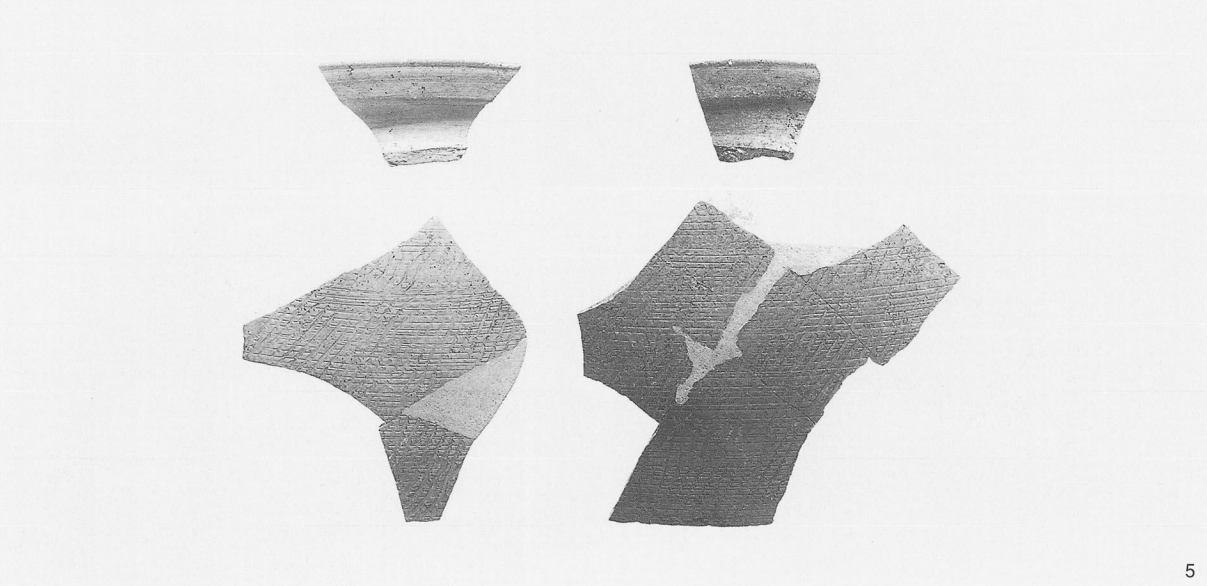
24

26

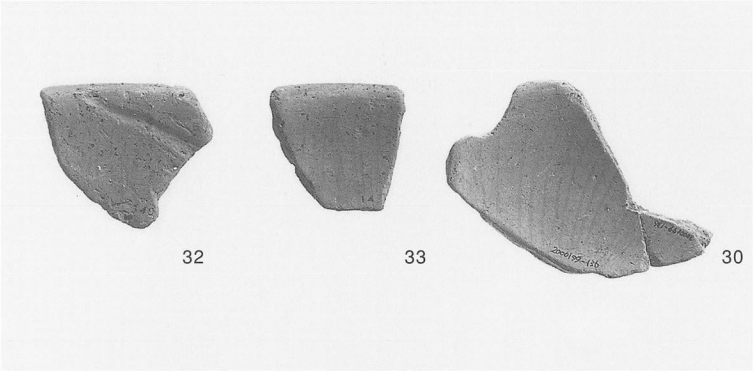

16

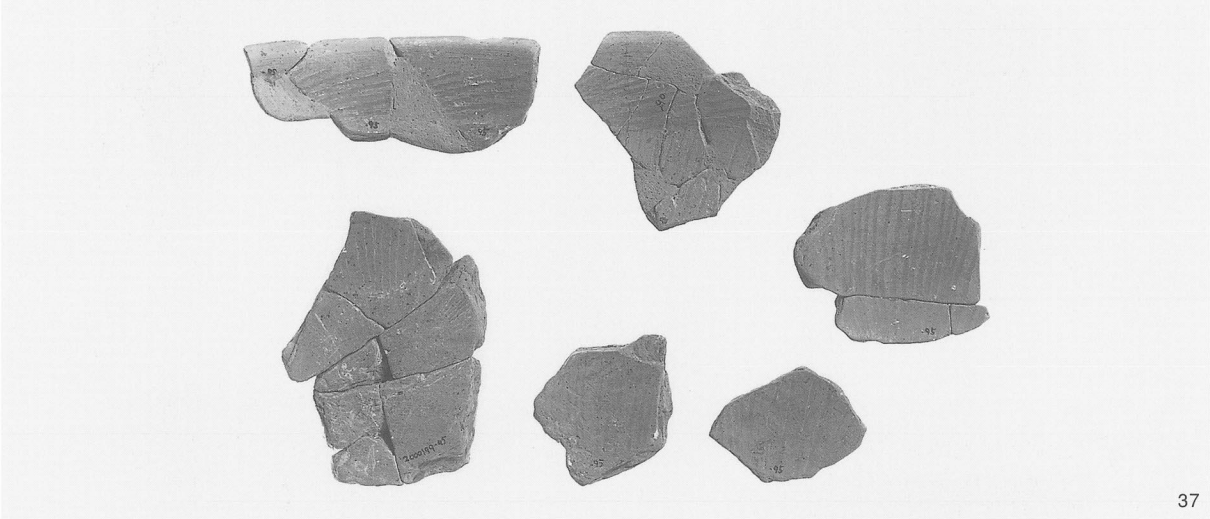
17

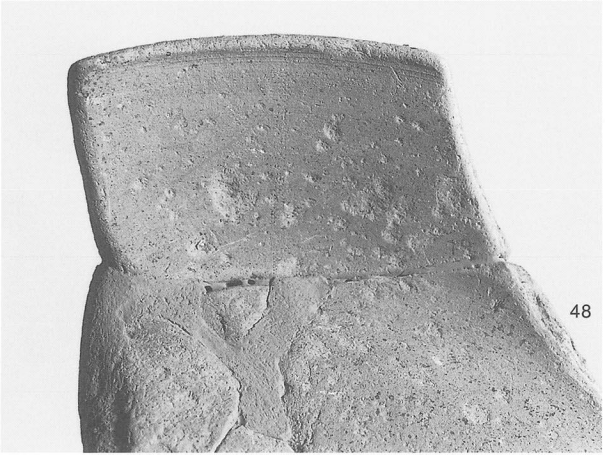
31


5

土器(2)







土器(3)

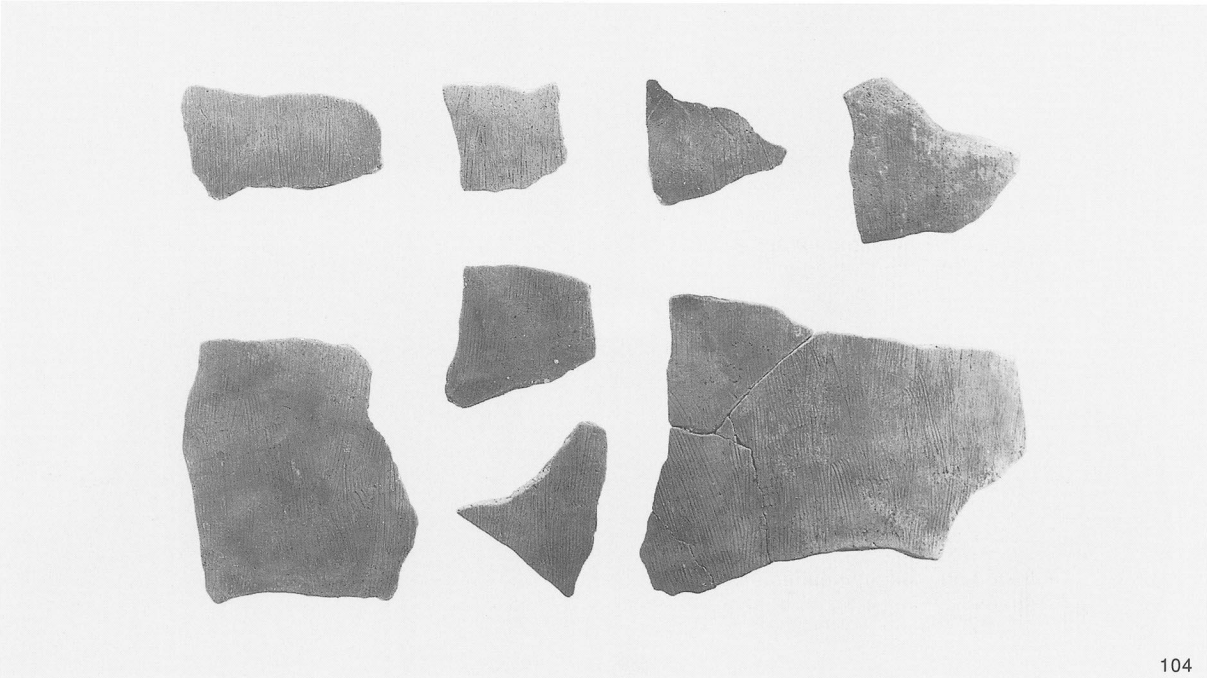
46

103

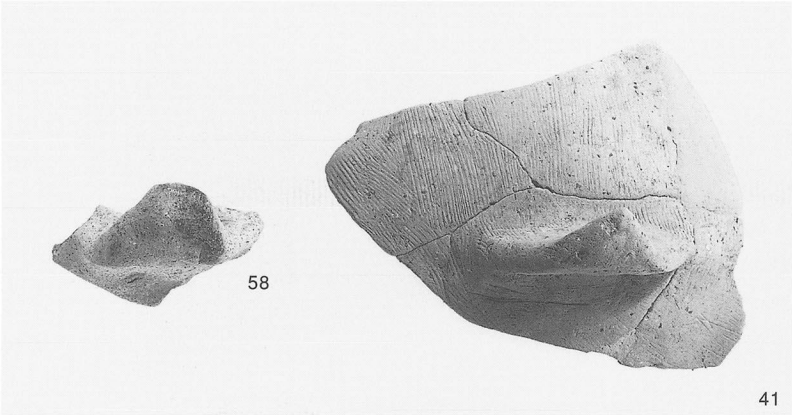
51

4

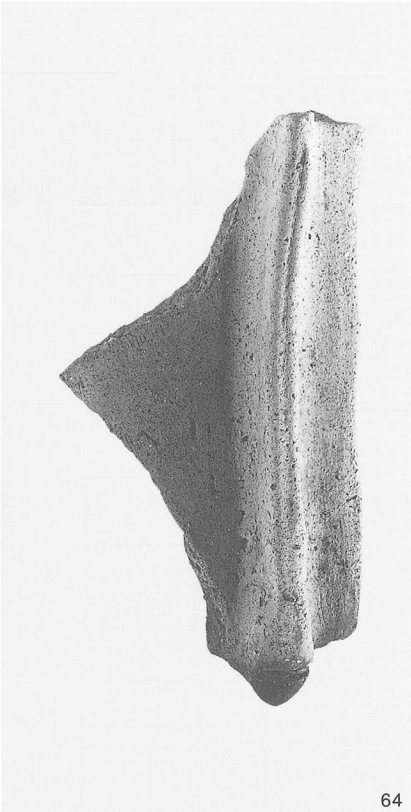
27



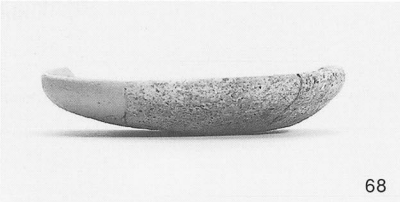
104

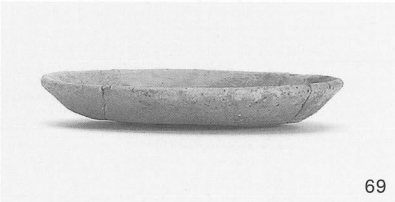

58
41

63

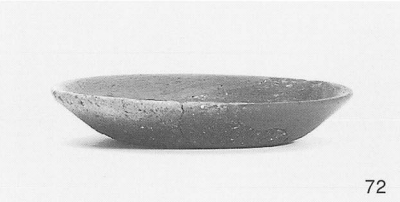

64

67


68


69

70


72

73

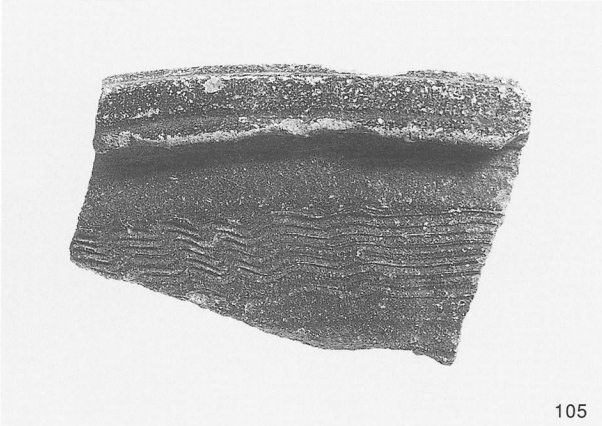
77

88

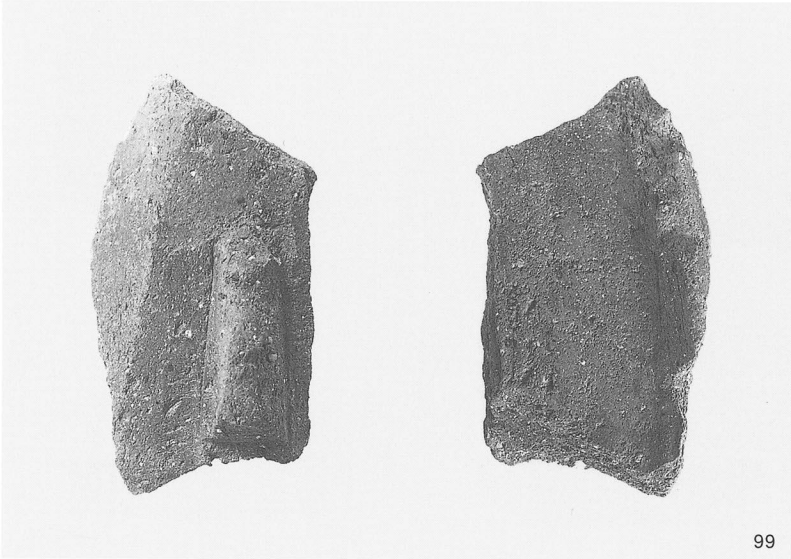
96

土器(5)、鉄器

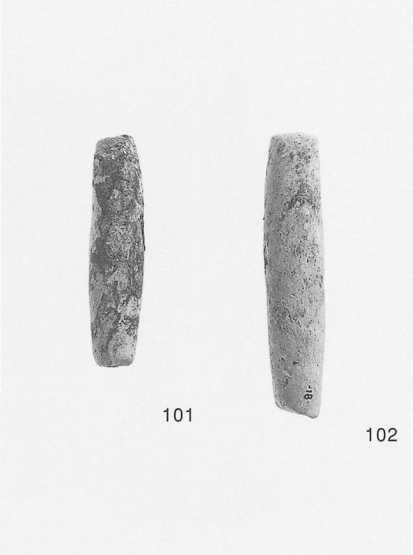
98



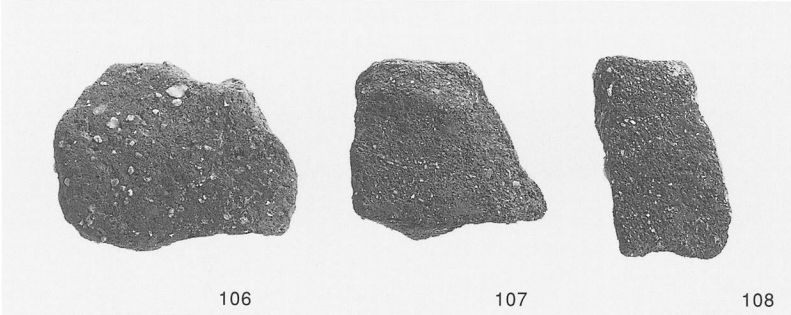
105



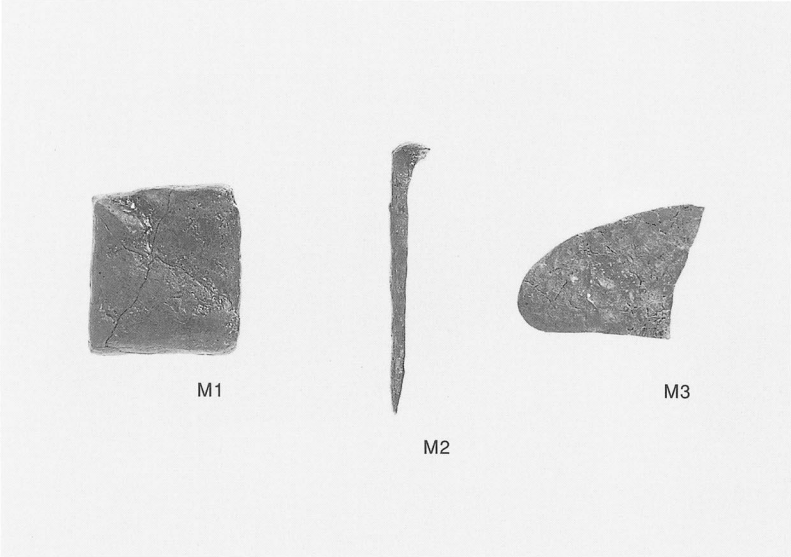
99



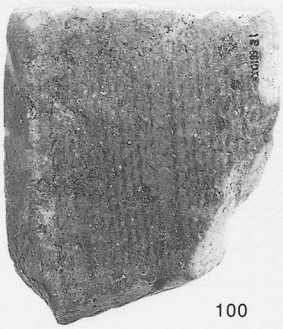
101 102



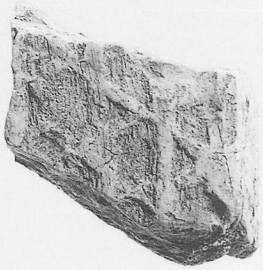
106 107 108

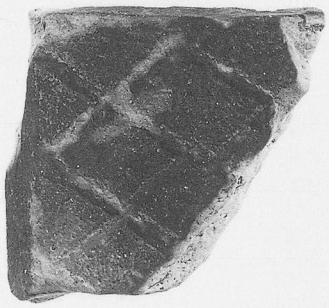


M1 M2 M3


100

109

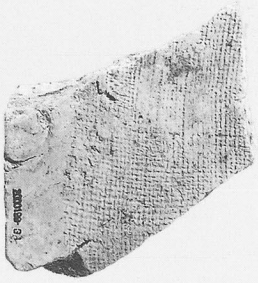

110

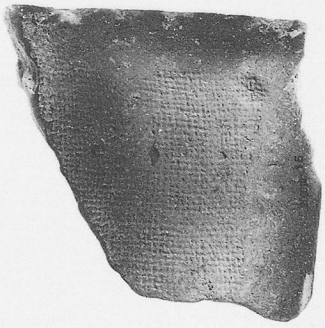

111

112

100

109


110


111

112

報告書抄録

ふりがな	たかぎいせき
書名	高木遺跡
副書名	(都)市川左岸線緊急街路整備工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第349冊
編著者名	中川　渉　　菱田淳子
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500　TEL079-437-5589
発行年月日	西暦2009（平成21）年3月23日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高木遺跡	姫路市花田町小川字長谷（ひめじしはなだちょうおがわあざはせ）	28201	020570 遺跡調査番号 2000199	34° 50′ 33″	134° 43′ 08″	20000817～20001012	620㎡	(都)市川左岸線緊急街路整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高木遺跡	集落跡	古墳時代後期～奈良時代	炉跡　1基 土坑　8基 溝　1基 ピット群	須恵器・土師器・鉄器	カマド・瓦 円面硯・風字硯 製塩土器
		平安時代	掘立柱建物　2棟 土坑　2基	須恵器・土師器・鉄器	

要約	高木遺跡の今回の調査で、古墳時代後期～奈良時代の何らかの生産に関わる施設、平安時代の小規模な建物を確認した。古墳時代後期から奈良時代の遺物の中でも、暗文を持つ土師器やカマド、瓦、硯などが遺跡の性格を考えるてがかりとなる特徴的な遺物である。

兵庫県文化財調査報告　第349冊

高　木　遺　跡

（都）市川左岸線緊急街路整備工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成21(2009)年3月23日

編集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500
TEL079-437-5589
発行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
印刷　株式会社 吉本宝文堂
〒675-1343　小野市来住町883-2